

エロティックハザード
TS添え DiscAzul

ムメイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人為的に生み出された化け物と、その苗床になる数奇な運命を辿る元男な美少女の物語

別 Disc Doll [<https://syosetu.org/novel/272041/>]

目次

前日談・バイオハザード発生直後〜0ま
で

悪夢の始まり	1
異変の序章	11
苗床への第一歩	21
変わってしまった住人	31
地獄の使徒との交わり	39
揺れるメイド	51
従者と人の相棒	59
メイドは識る	67
不可逆の傷	76
淫欲に折れる	84

メイドは自覚し深みに潜る
海の香、母なる香りに包まれ……
104 94

苗床メイドの恍惚	114
苗床メイドの一区切り	121
バイオハザード0付近	
養成所へようこそ	129
終わりは近くに	138
ヒルの王、顕現	148
終幕・人鬼は生まれ変わる	158

前日談・バイオハザード発生直後〇まで

悪夢の始まり

私は生まれながらにしてメイドでした。

そう、宿命付けられていたと言っても最早過言ではございません。たとえ私の性根が異性のものであれ、成ってしまつたのですから。

私の名はベルファスト・クーパー……栄えある大英帝国に生まれ育ち、貞淑なメイドとして育成された者です。

産まれが特殊で髪色は脱色したかのように色素が薄い物なのが特徴といえれば特徴でございませぬ。

目はアルビノらしい赤かと問われれば違います、私の目は薄い青にてございませぬ。

今年で20になり、今はアメリカ、ラクリーンシティの郊外・アークレイ山中にあるお屋敷でメイドを勤めております。

ここはオズウェル・E・スペンサー様の私邸……ですがご主人様はスペンサー様ではなく……

同じ志をもつ者であるジエームズ・マークス様になります。

ベルファストはご主人様……及びその配下である皆様にご奉仕する一介のメイドとしてこのお屋敷に置かせていただいています。

しかし……私が知る限りではそのマークス様にもお会いした事がございません。

もう10年程その姿は確認されていなく公には別所の管理を行っているとのことです。

実際は違うと……私の根底が訴えるのです。

私ベルファストは孤児でありながら家庭の温もりというのを良く存じている者です。

拾い上げられたのはメイド育成校の校長で全寮制の学校に即刻入ったのにも関わらず……

この異常性はどこからか……私に前世というものの記憶があることに由来します。

そも、前提として今の性別とは真逆な物が私の根底にありました。

今も時折思い出しては哀愁に浸る事もございます。

一介の学生であった私の前世はよく分からないまま今の身体になっていたのです。

この身体及び内包する精神性というものが……今の私を形成したのです。

ベルファスト……都市の名前ではありますがソレと同時にとある戦艦、およびそれをモチーフにした少女の名前でもあります。

私の身体は件の少女であり鉄のメイド長、人気投票出禁の女であるベルファストのものです。

強い精神性は身体に宿っていて一年と経たずして私の精神としつかりと癒着……私の揺れ動く精神の支えとなったのです。

そして今は心身共に之メイドとして動いていまして……栄えあるこのお屋敷でメイドを勤めているのです。

ただ、夢に時折出てくるのはこのアークレイ……ひいては麓に広がるラクーンに降り注ぐ悪夢の様な災害……

引きずり出される記憶の奔流はここ、スペンサー邸より始まると……そう、告げているのです。

この記憶はもちろんの事前世に由来するものでございます。

何が原因かまでは……終ぞ思い出すには至りませんでした……今は肅々とメイドとしてご奉仕するのみでございます。

今遣えますのは……このスペンサー邸にて勤務されるアンブレラ社の社員様でございます。

何をされているかは伺い知る事はございません……メイドが知るべきことではないと一蹴されております。

「ふう……おい、デカパイメイド」

「コーヒーをお持ち致しました」

メイドも立ち入る事を禁じられている区画から出てこられた皆様は一樣にお疲れの様子。

近くにベルファストが居れば直ぐ様に声を掛けてきますし……

居なければ必ず手拍子かベルが鳴りお呼び出しがかかります……

無論、リフレツシユの為のお飲み物と……

むにゅっ♥

「へへ、今日もイイ脂の乗り方してるな」

「お褒めに預かり光栄至極にございます」

このベルファストの大きく実り、いやらしくもぎつくりと開いた胸元を揉むこと。

目の保養、掌での楽しみ……そしてお飲み物でのリフレツシユ。

これらで激務へのモチベーションを維持されているでしょう。

あまり淫らな事になればメイドとしてはどうかとも思いますが……

ご主人様であるマーカス様……ひいてはアンブレラの為と思えばその様な些末な事はどうでも良いです。

「ちなみに今は？」

「トップバスト97、アンダー60……ウエストはより絞りまして57になりました、Lカップ相当になります」

「ケツも相当実ってるだろ、このスケベメイド」

ぱしんっ♥ぽよんっ

「っ……ヒップは94でございませす、こちらに赴任して以来増加傾向にございませす」

装いもそのまま、完璧たるメイド長そのままですからこうして弄ばれるのも華と言えましよう。

尻叩きは少々ご遠慮いただけたら幸いとは思いますが。

こうしてリフレッシュし、寝室に向かい……休息の後にまたこの奥へと消えてき……疲れ切ってお戻りになられる。

その間に私ベルファストはお屋敷の各所を掃除しベッドメイキングをし……食事もご用意するのです。

私一人ではございませんが……私の仕事量が多いのは事実。
とてもとても……充実した毎日を送っていました。

ですが、今日という日は少々空気が違っておりました。

休息に入られていた皆様が跳ね起きドタドタと慌ただしく奥へと向かわれたのです。

何事かと首を傾げましたが……メイドは深く追求することはなく……ただただ肅々と己の責務を果たすのみです。

……ですがそうも言っていられなくなりました。

区画には簡易的なエアロックが設けられ滅菌シャワーを浴びたり防護服を着たりとかなり物々しい雰囲気になっていました。

皆様かなり殺気立っていてお声がけするのも躊躇われる程。

また……立ち入りが禁じられている中庭の犬舎がかなり賑やかな事になってきていてあまりよろしい状況では無いかと。

慎ましやかながらに充実していた毎日は音を立てて崩れていく……そんな予兆を感じさせました。

同時に……悪夢に見ていた災害の始まりかと……ぼんやりと浮かんでいました。

日に日に様子がおかしくなっていく方が増え時には同僚を嘔む男性が増えてきたのです。

また犬舎からは大脱走も起きたとのことで……危険だから中庭には入らず……また外へ出ることも禁じられました。

先が見えない状況に一人、また一人と氣を触れさせていく……地獄がそこにはござい

ました。

不可思議な事にそんな影響を全く受けない方もいて、ベルファストもその一人でございました。

「今宵もまた、森が騒がしゅうございますね……」

お掃除を終え一日の終り……各所の見回りをしていた所です。

月明かりに照らされた外はうつつすらと見えますが……纏う空気は今の館内と同じで不穏そのもの。

耳を澄ませば犬とは思えないなにかの呻きが聴こえてくるのです。

確かに……今外に出ればよろしくない事になるでしょう。

そして館内も……どこかしらから怒号が聞こえてきます。

「……あらっ？」

少しばかり開いているお部屋を発見、アンブレラ職員様の寢室。

先日よりしきりに身体が痒いと仰言っていたのを覚えています。

また……お触りがかなりねちつくく、何時もよりも情熱的だったのも……

ふにゅん♥むにむに♥むにいいっ♥ぽよん♥すりすり……くりっ♥かりかり♥

「っ……っ」

浅ましい女の欲望が少々刺激される素敵な技巧だったと思います。

思い出せばついついとメイド服にポツチが浮かびかける程。

……これで根底が男とは言い難いとは私自身思います。

ですが、この色欲への貪欲さというのは……男由来の物があると存じます。

ベルファストにこのような色欲は……無かったと思います、めいびー。

……職務上の事です、個人的な一抹の期待などございません。

うつすらと開いているお部屋の戸に近づき……

「メイドのベルファストでございませう、少々戸が開いていますが……」

……声を掛けている最中も幻覚の様に胸を揉みしだかれ、お戯れをいただく……あの感覚が襲っておりませう。

反応が無く……恐る恐る戸を押し、中の様子を伺おうとした所でした。

その奥から手が伸び、メイドの手首を掴んだのです。

見上げれば……とてもとても興奮されたご様子な男性が、鼻息荒くしながら立っていません。

ぐにゅつ♥たぱんつ♥たぱんつ♥ぎゅつ♥ぎゅうつ♥

「はっ♥はっ♥こんなにも興奮されて……♥」

たくましい腕に引きずり込まれた私は、そのままベッドに押し倒され……興奮しきつ

た職員様に覆い被されました。

その血走った視線の先にあるのは私のLカップバストで次の瞬間には胸元は解放されてしまいました。

チエリーピンクな先端は薄つすらと固くなりかけていて自己主張をしていました。

そんな、いやらしい私を戒めるかのように……強引に、重く押し掛かれて……乳房を使つての自慰をされはじめたのです。

俗に言う馬乗りパイズリというものでございます、メイドめを使つての行為……初のことながら興奮を隠せない所でございます。

ご奉仕こそ己の誉であり悦びでもある……それが信条になっていきます故。

乳房の中でビクビクと震え、跳ね……腰を打ち付ける回数が重なる度に膨れ上がっていく……

興奮から私の乳房には汗がじんわりと浮かび……谷間にはペニスの先走り汁が付着し……淫らな音を奏するではありませんか。

一発一発……乳房に性の滾りを受ければ大きく撓み汗が舞い……鼻につくのは淫臭そのもの。

見下ろす鼻先に太い太いペニスの先端が見え隠れ……さながら、お預けをされる犬の気分でございます……♥

「クウ……射精す……!! 飲メ……!」

「仰せのっ♥ままに……♥」

頭を抑え込まれそのまま口をつけ、口腔内にお情けを賜りました……

ふう……これはさぞ欲求がスツキリされたかと……

びゅるるるうっ♥びゅくっ♥びゅうーっ♥

フーツ♥フーツ♥ごくんっ……ごくっ♥

進る精液をしつかりと飲み唇を離せば……私の唇とペニスの間に白濁の橋が。

……ですが、まだまだシ足りないご様子……♥

「今夜はメイドめに夜伽を、ご命令されるご様子で……ペルファスト、全力で参ります」

ただ、私は見落としていたのです。

その淫臭に混じり……腐臭がする事に……

異変の序章

うら若きメイドとしてこの館に來た段階でいつかは夜伽をするものだ。

その覚悟はしてきていました、元々男であるというのには些末な事。

ベルファストに求められる事はメイドとして常に一流のものを提供しなくてはなりません。

それこそがご主人様へのご奉仕に、メイドとしての支えとなりえるから……その他に
ごさいません。

ただ……初となる体験をご主人様以外の方に捧げることになるのは、正直想定外でございしました。

スペンサー様、マークス様共にかなりの女体好きとお伺いしていました。

ご老齢ながらそれはそれは……数多のメイドにお手つきをされてお戯れをされていと、そう聞き及んでいました。

ですので早々にベルファストも身体を捧げることになると思っていました……

「フーツ……フーツ……！」

「ふふ、どうか……どうか、一度深呼吸を。メイドは貴方様より逃げはしません」

マーカス様配下のアンブレラ社の方にお部屋に引き込まれ馬乗りパイズリフェラの後……

まだまだ猛り熱り立つペニスを突きつけるご様子で……メイドめは押し倒されたまま。

少々身動きして太ももをすり合わせ……意識してロングスカートをずらすのです。

真つ白なソックスとガーターが見えるほどにずらすとソレを目敏く見られたのでしよう。

視線が合った下り下りずれたり……とても忙しく、豊満な乳房の合間から見えるペニスは……

つい数秒前までは乳房に埋もれていたソレはさらに膨らみ大きく……凶悪なまでに振り返っていました。

これはかなり大きいです、処女には少々つらいと思います。

辛いのは重々承知、ソレ以上に……常日頃より乳房や臀部にお戯れを受けご愛顧頂いていたメイドでございます。

複雑ではありますが……このペニスで処女貫通されると思うと誇らしくも思います。

それだけ私をお求めになられている……誇らしいと思うのは当然でございます。

ただ……こちらの自由は完全に奪われていて、ご奉仕の選択肢が限られるのは中々

……

両腕は体重をしつかりと載せられ押さえつけられているので……抵抗を許されれば振り払う事もできるでしょうが……

すり♥すりすり……

「あつ……♥焦らすのもお上手です……♥」

なんて大きな声なんでしょう……ショーツとスカート越しに擦り付けられる剛直はメイドの浅ましい淫らなメスを容易く呼び起こしました。

つついといと無意識に期待を孕んだ吐息が漏れていたのです。

私が興奮し、セックスを望んでいるのもおそらくは伝わってしまったでしょう。

淫乱の誹りも受けるかもしれませんが……それはそれで良いかと。

ご奉仕こそメイドの本懐、淫乱と罵られようとご奉仕し満足頂ければソレで良いのです。

この荒々しい吐息を受けるのも……この荒々しく猛り狂う剛直を受け慰める役割も……ベルファストがお受けしましょう。

するりとスカートのの中に入り込み……ショーツのクロッチを起用にも先端でずらされました。

……始まり、ですね。

つぷ……ぶちっ、どちゅんっ ♥ ぶるんっ ♥ たっぽん ♥

「ツツーは、あ……ああ……！」

鋭く、身を裂く痛みが頭に突き上がってくる。

初となる挿入は……優しさや配慮というものは無く、ただただ情欲の限りで叩きつけられる物。

身体が浮くのでは？と思うほど強く、奥にディープキスされ……支えなく左右に若干垂れる乳房も大きく弾む。

たしかに、痛みは強いですが……悲鳴をあげるほどではございません……！

もとより……望んだこと、悲鳴など挙げて萎えさせてはなりません……！

ぱんっ ♥ ぱんっ ♥

「ツ♥あっ♥くっ♥♥うんっ♥んっ♥」

初体験というのもあって……お褒めの言葉を並べる事もままなりません……！

不覚っ……一回一回の強く大きなストロークで言葉が紡げないのです。

まだまだ痛みはしますが……抱かれ、ご寵愛頂いている事実が大変、大変悦ばしく

……声に乗ってしまうのです。

精神は肉体を……などと言いますが、この様な形で体感するとは……♥

遠慮なされる気配はありませんが……それでも泣き叫ぶより喘ぎよがる方が興奮される事でしょう。

サディストであつたとは記憶していません……

ぱんっ♡ぐりぐりぐりいっ……ぬるうっ……たぱんっ♡

「つつ?!?!?♡あ、あ……♡ああんっ♡♡」

これはこれで、ある意味完璧なのかもしれません。

日々そつなくセクハラにも動じないメイドめがベッドの上では為す術もなく喘ぎよがる……

これで興奮されない殿方はいらっしやらないでしょう……

ご奉仕出来ないのはメイドとしては業腹物ですが、全てはご奉仕し悦ばれる事が大事です故。

はあっ……それにこの、官能の熱は……如何にメイドとして自分を律するベルファストでも……抗いがたい物、です♡

もつともつと、欲してしまう……ふふ、心底ベルファストは淫乱だったのかもしれない……

たっぱんっ♡ぱんぱんぱんっ♡むにっ♡ぐにゆう……ちゅっぶ、ぢゅううううつつ♡

♡

「~~~~~ツツツ♥♥♥♥♥」

杭打ちの様に体重を掛け何度も何度も執拗に奥を叩かれながら……

ベルファストがもう緑に動けないほどになっていると判断されたのでしょうか……

両手は私の揺れ弾む乳房へ。

そして揉み寄せて……両方ともに吸い上げられたのです。

パチパチと眼の前が明滅する感覚……ああ、絶頂……官能の絶頂に至り……声なき嬌声が上がってしまう。

押し倒されている我が身は仰け反り硬直し……ピクピク震え……

何よりも強い……幸福感に包まれていくのでした……

まだまだ射精というお情けを頂いていないのに……女体の快樂というのは……凄ま

じい、です♥

どぶっ♥びゆくっ♥びゆるるう♥♥

「ほ、あ————ツツ♥♥♥」

腔内に爆ぜる圧倒的な熱量、どくどくと注がれるこの感覚は間違いなく……種付けの瞬間でしょう。

理解するよりも先に身体が悦び絶頂に絶頂を重ね数秒の合間呼吸すら出来ない程に追い込まれました……♥

この、初めて感じる……ご寵愛の証とも言える滴を注がれる感覚、すでに私を魅了して止まないです♥

その後、3度腔内射精というご寵愛の滴を受けた後でした。

その頃には痛みは完全になくなり、心底この性行為に対して快楽を味わっていました。

私はずいぶんと被虐癖があるのでしょいか、乱暴にされればされるほどに昂ぶるのです。

性癖というのも自覚した頃に鼻についたのは……お互いの淫らな体液の臭いではなく……

甘い睦事の空間に似つかわしい腐臭でした。

なにより私を組み敷いている殿方の様子がおかしいのです。

喘ぐでもなく、ブツブツと……要領を得ない言葉にもならない物をずつつぶやいているのです。

絶頂に目が眩む合間に見た瞳というのも正気を失っているとしか思えません。

いくら興奮されていようと正気かどうかは流石に見分けがつかます。

甘く蕩けつつあった私の頭に冷たい物が差し込んできました。

『正気を失っているのを見かけたら通報しろ、接触したならお前も連行する』

恐らくは今館の奥で何かしらの感染症が広がっているのでしょう。

その一端がこの狂気なのでしょうか……

……早急に処置が必要と思えばすぐにでも……

どくんっ♡

「っ?!?!?♡な、に♡があっ♡♡」

ご無礼を承知で制圧した後には急ぎ駆け込もうかと思いましたが。

しかし身体を動かさそうとした瞬間でした。

身体の芯が熱く熱く疼き、子種を受けた子宮から伝播していき……全身にその疼きが侵食していくのです。

何時いかなる時もご主人様をお護りするのもメイドの勤め、体術の類は修めているのですが……

それを行使することもままならないほどに力が抜けていくのです。

——ウ” ウウウ……

今、覆いかぶさっている……殿方が原因なの、でしょうか？

それともこれは女性の性感の……一端なのでしょうか？

徐々に瞳孔が開きヨダレを垂らし……腰使いが荒く疲れ知らずに振り続ける男性の顔を見上げ……

「あんっ♥あっ♥♥ああああっ♥ど、どうか♥ああっ♥♥お鎮まりを♥♥
あああああっ♥♥♥♥」

必死に呼びかけ押しつけようと必死になるのですが……

終ぞ正気に戻れることはなく……メイドめはその後、4時間に渡りご寵愛を受け続けるのでした。

巡回に来た警備員が気付かなければ……きつと翌朝まで続いていた事でしょう。

かくして私、ベルファストも接触者として隔離処理されることと相成りました。

概ね抱かれ続けている間に考えた通りとなっておりました。

初めて見るそこは……さながら牢屋と呼んで差し支えない様相。

アンブレラ社がしていることの一端を目の当たりにしましたが……不思議と動揺していません。

悪夢との整合性が取れたとも言えましょうか。

特定区画の外に出ようとすれば射殺されるというのも目の当たりにしました。

……これから、私はどうなるのでしょうか。

どくんっ♥

「——ッ♥」

少なくとも、もう澄まし顔のままメイドを務めるのは難しいかもしれません。あの激しい種付けを思い出しては発情してしまうのです。

ふ……淫乱、でしょうか？それとも……何かしらの病由来の物でしょうか？軟禁されている隔離部屋でただただ……待つしかありませんね。

苗床への第一歩

隔離が始まってから気を狂わせた方は多くなつていく一方。

また、少し部屋の外を覗けば……至る所に血付着していたり……

担ぎ込まれた女性に群がり輪姦し始める様を目の当たりにしてゾツとします。

いかにご奉仕が命であるメイドであれ……あの様な勢いで輪姦されれば狂気に吞まれます。

……あのセックス漬けでも十分すぎるほどに効いているのです。

ゾツとするのは当然かと……とてもではありませんが……理知的な人間のソレではありません。

蛇の交尾であつたり魚類の……そういった物を彷彿とさせる獣性が見受けられます。

……もしかしたら数時間後には私もあなっているのかもしれない。

得も言えぬ不安が胸に広がります……理性を失う兆候はございませんが、不安は覚えてしまいます。

食事の方も……正直食欲が出なくなりますね、ぐつと堪えて食しますが吐き気が辛いです。

「ふう……紅茶を淹れたいですね」

こういつたよろしく無い状況ではストレスを溜め込む一方。

発散させるのにはスキンシップであつたり息抜きが欲しくなる所です。

スキンシップは望めない状態、息抜きの紅茶を淹れる、お掃除にお洗濯……諸々が取り上げられているのでかなり辛いです。

それに……耳にほぼぼと飛び込んでくるのは狂った様な怒号。

精神病棟に勤める人々はこんな環境なのでしようか、敬意を表します。

……隔離部屋に押し込められているのはある意味良いようで地獄です。

そも、隔離処理は今のところ私だけのご様子、何が違うのでしょうか？

今日も慌ただしく警備員の方が奥へと消えてき……時折銃声が聞こえてきます。

「……はあ」

後どれ程ここで待機していればよろしいのでしょうか？

瞑目し思わず嘆息が出てしまうのも無理からず。

防護服を着た方も日に日に減り徐々にその顔に正気というものが失われて……

そんな様子についていといと引きずられ……この身体になつたばかりの不安定な我が身を思い出します。

突然と12歳の小娘になつた私は言語も通じずぼんやりと霧の街、ロンドンに居るの

だけを認識したものです。

まだまだ二次性徴を迎えていなかったのもあって当初は気楽と言えば気楽。

しかし学はなく言語も通じない……そんな子供が生きていける程甘くはない。

直ぐ様駆けずり回って警察に駆け込み……孤児として孤児院……クーパー孤児院に叩き込まれたのでした。

そこで必死にクイーン・イングリッシュを学び最低限の学を身に着けた……

ついでに、生理も味わい……ここが一番精神的に来たのでしたね。

当初の私の生理はかなり重たく……憂鬱でしたね、懐かしく思います。

ガリガリと男だったプライドは削られ……どうにかなりそうだった。

それを紛らわすように身体を動かしたのが……結局、メイドの始まりと言えたのでしたね。

成長してから納得したのですが……当初はまるで知らない自分が出てきたようなもので……これまた発狂寸前にいったものです。

「……おや、随分と静まり……ふむ？」

回想に更け入っているとふと、耳につく音が無くなっていたのです。

さらに言えば警備員の方も消えていて……不思議に思う所でございます。

隔離部屋の扉を開けてみれば……外は不気味なほどに静まり返っていました。

……大変お掃除しがいいのあるご様子ですが、隔離処理は終わったと見てよろしいのでしょうか？

近隣に警備員や職員様が居ないか見てみましょう。

メイドとして職務に復帰してよいのかも決められるのは当館の保守隊長様ですので。

歩けど歩けど残念ながら人にすれ違う事はございません。

まるで人間が私一人になったかのように思う程お屋敷が静まり返っているのです。

不気味な静まり方……電気もまた一部落ちていてオイルランプがなければ足元が危うくあります。

外へ出るのは……流石に認可されないでしょう。普段立ち入れない所を徹底的に見て回りましょう……

どくんっ ♥

「ッ♥」

相変わらず……不定期ながら身体が疼く、これは……一体どうしてしまったのでしょうか？

久方ぶりに心揺れ動かされる事象ですね……まだまだ、私も未熟な小娘ということでしょう。

淫らな情欲が鎌首をもたげ……脳裏に浮かぶのはあの苛烈な初体験……

頭を振つても離れず悶々とさせてくる……これではメイド失格と言えましょう。

貞淑というものは大いに外れましたが常にご奉仕を念頭におくべきメイドが……このような……

……ふう、己を律する為に嵌めた首輪を撫でて顔をあげる。

ガタンツ……

「……こちらからでしょうか？」

ようやくと聞こえた人の気配、鍵等はかかつておらず中は薄っすらと保安灯が照らす状態。

外は夜……こちらは……保安員の休憩所でしょうか？

乱雑に置かれた書類にメモ紙……私の隠し撮り写真まで。

隠し撮り等せずともご命令であれば……ふふ、愛らしい事で。

さて……件の音はどちらからでしょう、もつと奥からでしょうか？

電気のスイッチは……陥没して壊れていますね、叩きつけたような痕が確認できません。

なにか揉め事が……それともここでもあの狂ったような……

「っ……これ、は……」

薄つすらと浮かび上がるそのシルエツトはあり得ざる物でした。

床の一部からゆらゆらと揺れながら立ち上るそれは……大凡陸上では見ることは無い……

いわゆる触手というもので細長くしなり……その側には首をへし折られた男性が倒れていました。

下手人はこの触手と見て間違いないかと思いますが……

「ふっ……狂人の次は悍ましい程巨大な触手、悪魔崇拜の儀式の結果だったりするのでしょうか」

私の太もも程はあろうかという太さの触手は次の獲物にと私に向かって来ました。

無論それに捕まる訳にもいかず……後ろに飛び退けば……あまり距離は伸びない様子。

すんなりと諦めて仕留めたのでしよう男性の遺体に巻き付き……

間違いなく異常事態が発生している、一刻も早く……状況をお知らせしませんと。

後々お仕置きをされるのは構いません、隔離区画からも出て内線を……

バタンッ！タッタッタッ……

大きな音を立てるのはお許し下さい。

一刻を争う事態なのは間違いないのですから……！

思えば、メイドになってからこうして走ることなど、一切ありませんでしたね……！
随分と胸が大きく弾み、体幹がずれてしましますね。訓練をしなければ……

はっ……人影が今……息を整えつつよく目を凝らせば……

消灯された通路にいる、月明かりに照らされ見えるそのお顔は……

「……ま、マークス……ご主人様？」

写真でのみ拝見し、いつか謁見することを夢見ておりましたご主人様でした。

……流石に、異常事態故にお戻りになられたのでしょうか？

記憶の根底にある物を振り払い……駆け寄る。

「ああ、お会いしようございまして……私、貴方様のメイドとしてこの館に……」

お側まで駆け寄り、跪いた私に対し……マークスご主人様は……

「……は……？」

ぐにやりと形を変え、見るも恐ろしいなにかの集合体へと変貌されたのです。

我がご主人様は……悪魔か、なにかだったのでしょうか？

ぐるりぐるり……巡るこの感覚、懐かしゆうございます……

訳も分からないままに押し倒され、よくわからない……ネバネバとした液体が私の顔

や乳房に垂れてくるのです。

紛れもないマーカス様のお顔、出で立ちでした……ならば、この悪魔のような方も……？

「……私は、マーカス様のメイド、ベルファストと申します……どうぞ、如何様にもお使いください。お伝えする事はその合間にも……」

ならば、メイドはご奉仕するのみでございます。

ご主人様がどの様な形であれ、生存されているのが確認できた……それだけでもメイドとしては嬉しい限りなのです。

反応は、なにもないままですが……形変わったその両腕はベルファストの胸を鷲掴みにされて……

「はあっ……あ……こそばゆく、不思議なっ……あっ♥感覚です」

包み込まれるように揉まれれば……じんわりと広がっていくのは官能。

これが非常に……嬉しく……

「っ……これは、いったい？」

このままご主人様の寵愛を……とうっとりしかけていた私でしたが……

さらに一人、二人……マーカス様が現れれば……流石に困惑してしまいます。

では、このマーカス様達はいったい……？

その答えとしてぽとりと落ちてきたのは……何とも奇妙なヒルでございました……

ゾワリと背筋が一瞬にして凍りつきました。

ヒルの集合体はそのまま私を押し倒したまま……蠢きながら……メイド服の奥深くへと溶け込むように徐々に浸透してくるのでした。

じゅるっ♥じゅるるうううっ♥ちゅっぶっ♥ちゅっちゅっ♥

「はっ♥あああっ♥あっ♥おお♥あうっ♥あああっ♥」

3人分のヒルは私の身体に殺到してきました……知覚できる範囲で覆われていないのは……首より上だけ、でしょうか？

生き血を吸われている……わけでは無さそう、ですが……

異常極まる体験をしながらも口から出てくる嬌声に我が事ながら困惑が止まりません。

ですが、そう……最初、ご主人様と思い胸を弄られた時もそう……真っ先に快感が走ったのです。

一切疑わなかったのですが……これはこれで異常です。

ただ……ただ、乳房を掴まれただけでここまで、我慢ならないほどに？

確認が得られない今は……このヒルがマークスご主人様の正体なのかもしれません

し……

そうじゃない可能性も当然存在する、シュレディンガーのご主人様状態。

前者であればお仕置きされることでしょう、後者であればご主人様を騙る不屈き者と
して焼却せねば……！

ぢゆうううっ ♡♡♡

「はああああああっ ♡♡♡」

悍ましい体験です……この屋敷の方であれば、強姦も許容出来たことでしょう。

ですが、今……膣に殺到されているのは間違いないなくヒルそのもの。

子宮にも一部潜り込んでいる事でしょう……想像するに恐ろしい事です。

なのに、なのに……どうしてこうも身体は昂ぶる一方なのでしょう？

全身をほぼ隈無く吸い立てられる……その感覚に絶頂を迎え悶える私は……

はらり、床に涙が溢れていくのでした。

変わってしまった住人

世にも恐ろしいヒルに全身を覆われる、こんな体験をする事は今後一切無いと思いません。

恐ろしくも忘れ難い快感を私の身に刻んだヒル達は……私の何度か絶頂に導いた後蜘蛛の子を散らすように消えていきました。

マーカスご主人様では……無いのでしょうか。

全身をヒルの分泌物でねっとりコーティングされ……絨毯にもシミが浮かんでいきます……

「はあっ♥はあっ♥……はあ……♥ふ……ああ……♥」

私の身体は未だ嘗て体験したことない程に興奮しきっています。

あのような……異種に身体を辱められたのにも関わらず。

本来あり得ざる相手だというのに……

快感で痺れる私の身体はまるで一切……力を入れること叶わず床に横たわる事しかままなりません。

疲弊した訳ではないと思いますが……今、どれほど時間が流れたのでしょうか？

未だに興奮の余韻が抜けきらない鼓動は早く息苦しい程。

下腹部の熱、胸元の熱も同じくあの激しい夜の物と同じ、ジクジクと私の身体を蝕んでいく。

どくんっ

「ツ♥♥あ……あああっ♥」

熱を孕んだ身体が疼き、身体を竦ませ……さらなる快楽を求め始める。

私という理性の鎖から解き放たれようと暴れているかのようにも……思えて仕方がない。

これは性を知ったからでしょうか？

……呼吸を整えようとしても大きく揺れ弾む胸が微かな快楽を貪欲にも生み出すのです。

落ち着けることも出来ずただただ時間が私の身体を落ち着けるのを待つ他……

「はあ……どなたか、いらっしやるので……？」

ふと耳に入ったのはゆったりと歩かれる足音……今この状況をご覧になれるのは少々よろしくないですが……

今起きている異常についてお話出来たら御の字です。

足音がする方へ顔を向けてみれば……遠くでうっすらと人のシルエツトが。

ゆらりゆらりと左右に揺れているご様子で……あまり体調が芳しくないご様子。今のベルファストでなければ直ぐ様に駆け寄り……看病に入りましたのに。

「つ……………くあつ……………ううんっ♥はあ……………くっ♥」

身体に鞭打ち立ち上がるうとするも腕にまともに力が入らず……その場で強く背を打ち胸を大いにはずませる始末。

それでまた喘ぐ淫らさを見せてしまい……これはどんな誹りを受けても……

ゆらりゆらりと迫るその人影は……月明かりに照らされ、またも私から言葉を奪う。

口元は血で赤く染まり目は白濁し、皮膚はあちこち爛れた……異様な姿の男性でした。

その衣服からアンブレラ社職員であるのは認識できますが……！！

「……………これも、天命なのでしょうか」

異様なご様子なのは私含めこの館全てに広く渡っているのでしょうか。

横たわる私に覆い被さられる職員様は……腐臭が強く、異様に軽く……ぼとぼと唾液を垂らすご様子は……

さながら魔術によって蘇ったゾンビやグールといったものに思えてなりませんでした。

死を予感して身が竦みますが……目を引いたのは……

とてもとても太く大きく衣服を破って飛び出している大きなペニスでした。

意味をなさないうめき声が耳元で囁かれる。

たくましい腕を背に回され抱き寄せられながら……下腹部には凶器なペニスが擦り付けられ……

その動きで徐々に徐々に……貞淑なスカートが捲られていく……

につちゅ♥につちゅ♥

「はっ……はっ……はっ♥」

正気は失われている様子ですが……メイドめに対する情欲というものはお忘れになられていないご様子。

抱きしめている腕は片方外され……ああ、メイドの臀部を……

理性ある内にされていたら、どれだけ幸せいっぱいに抱かれる事になったか……

今は今で……これはこれでご奉仕しなければ。

どこかに正気があるかもしれませんので……完全に獣に落ちていいるならば……その時はその時でございませす。

……あのヒルは、どうなのでしょう？

「どうぞ、メイドめは……準備万端でございませす……♥」

準備万端……いえ、そうさせられている……あのヒルの予熱が引かないのです。なにが準備万端か……自嘲は胸の奥にしまい込み、今はこの御方へご奉仕いたしましよ。

腕は……ふ、なんとか動かしてスカートをたくし上げるとは出来ませぬ。

スカートの布からショーツの、純白レースの慎ましいショーツ一枚になれば……擦り付けられるペニスの熱さというのが……

きゅんっ

「っ♥はっ♥ふうっ♥……っっ♥」

認識すればするほどに身体が昂り、殿方の……ペニスを求めてならないのです。

子宮が、あのヒルに蹂躪された最奥が疼いて疼いて……♥

どちゅんっ♥ぼこ……っ♥びゅくっ♥

「ほぎゅ——ツツツ♥♥」

ショーツをずらしてしまえば直ぐ様に怒張が滑り込み……

私の中と言うものが一発で突き堕とされていく……

疼く胸よりなにか溢れ、甘い甘い香りが漂う……

ばんばんっ♥どちゅんっ♥どっどっ♥

「……ツツ♥おまつ♥ひぎゅううっ♥んうおおおおっっ♥♥♥」

ただ、メイドの考えがまとまる時間的猶予は与えられず……

そのまま獣欲の限りに腰を振られる……私の頭の中も……数秒ともたず、色欲に染まっていたのでした……

メイドは知らない、今この館に理性を保っているのはメイドのみであること。

化け物が跋扈しその全てが食欲と性欲に満ち満ちて……その肢体を使って生殖しようとしていることを……

己を今抱く男もほぼ死体同然であることも……

そうしている元凶が自分の身にも宿っているということも、知らない。

たぼんっ♥たぼんっ♥ぼんっ♥ぼんっ♥

たぶん♥ぷしっ♥ぶるんっ♥ぼよん♥

「あああああつっ♥いひっ♥いいいっ♥あああつ♥あんっ♥あああつ♥あひっ♥」

快樂以外に考えるだけの余裕が生まれたのはどれほど突かれたあとでしょうか？

身体は反るか丸まるかの反復横跳びを余儀なくされ……開かれた股の先、足はピンつと伸びたまま。

自覚した時にはゾツとしたのですが……乳房の先からは母乳が漏れ出ていました。

自分は確か数日前まで処女であった、それまでずっと乳房や臀部へのセクハラだけで済んでいたメイド。

どうして？という疑問が脳を半分ほど埋め尽くす。

しかしそんな私の困惑とは無関係に乳房からは湯水のように母乳が出ていく一方。揺れ弾むその質量も……心なしかより重く……

ぎゅむっ ♡♡ちゅっぶ……ぢゅうっ ♡♡

「お、あツツ ♡♡♡」

ああ……強く胸を掴まれた、それだけで絶頂に至る快楽を……

そして両乳房を一気に吸い上げられる……そこにあるのは短期間で何度も何度も襲ってくる非常に強い快楽。

もうコレ以上に無いと思っていた快楽の天井というのが書き換えられて……これ以外に考えが及ばなくさせられそう、です……♡

我が身がメイドでなければ……とうの昔に性の傀儡に成り下がっていたことでしょう……！

耐えきつてみせましょう……このような快楽に打ち勝つてこそメイド……！

ご奉仕に全てを捧げる……

どぶっっ ♡♡びゅううっ ♡♡びゅーっ ♡♡びゅっ ♡♡びゅくっっ ♡♡

「…………お♥ほあ♥」

あ、ああ…………この、熱く迸る…………精液、ダメです、こんなの…………猛毒です…………♥
ただ一発、子宮に叩きつけられるだけでも凄まじいのですのに…………

一回の射精で何度も、何度も…………波状攻撃と思うほどに何度も…………

今はまだ耐えられて居ますが…………これがあと何回…………どれほど続くのでしょうか？

まだまだ…………膣の中を動き続けるペニスは太く強く脈動していて…………終わりの気配を見せません。

「ウウ——ウ”ウ…………」

「だ、だいじょうぶです…………♥まだまだ…………ペルファストは、だいじょうぶれす…………♥」

射精が一旦区切りがつくと…………今度は呻きながら休憩を…………されている様子ではな
く…………

私の身を案じているのか…………ほんの少し、コチラを向かれます。

心配される程ではございません…………と涼しく言い切れたらイイものですが…………

ごりゆつ、ぐりぐりつ♥…………ぱちゅんつ♥

「ほぎゆつ♥♥ま、まだ…………イケます、とも…………ああああんつ♥あんつ♥♥」

どちらが先にイキ果てるかの…………勝負みたいです。

ご寵愛いただき、恐悦至極で…………♥

地獄の使徒との交わり

かぶっ♥ぱんぱんっ♥たぱんっ♥

「……………ほっ♥お……………おお♥♥」

時折首元や乳房に齒型を付けられながら……………私は犯されてきました。

犯している間にも職員様だった物は段々とその形を崩していく。

唯一形が不変だったのはペニスだけ……………他は爛れ落ち肉が見えたり骨が見えるほど
になつたり。

髪の毛もハラハラと抜け落ちていき、私に5度の腔内射精を戴く頃には丸坊主になつ
ていました。

あれほど筋肉があり私を一方的に抑えつけるに至るその体躯も……………数時間と経たず
して見るも無惨な姿に……………

まるで一人、タイムマシーンで加速しているかのような……………そんな衰弱の仕方をして
いつていたのです。

どれだけ私の母乳を啜ろうと……………栄養価が足りないのでしょう。

逆に私もどれだけ母乳を啜られようと……………貧血や水分不足に陥る感じがしないので

す。

摩訶不思議……ですが、今現状……私が認識している限りではそう、なので……指折り数えるのも億劫になるほど腔内に出され、体感ではスカートも精液まみれなコトでしょう……

もう腰を動かすのもやつとで……さながらスローセックスになっていました……それでも私の膈は過敏に反応していて……快樂を得ていたのです。

「ウ……ウウ……ウ……」

「……こちらを、見られて……はあっ♥いかが……なされましたか？」

濁った目、みるみる内に痩せこけた顔……コチラを見下ろしてなにを訴えようというのでしょうか？

メイドに求めるご奉仕でしたら何なりと……食事がご所望でしたら直ぐにお持ち致します。

犯されている間に出た涙、涎で非常に乱れては居ますが……努めて貞淑な、普段どおりのお澄まし顔を見せましょう。

一瞬白濁した目が揺らいで……

「ア……リ……アトウ……ネムイ……」

「……おやすみなさいませ」

ゆつくりと目を閉じられると……驚くほどに軽くなった身体が覆いかぶさり……あれだけ強く感じていたペニスの熱も脈動も……一切が失われました。

その変わり果てた顔もどこか安らいで居るように見えます。

メイドは……その最期を少しでも良い物に変えられたのでしょうか？

腕を回し、抱いてみれば……背中越しに感じた脈動が……今、止まりました。

「どうか安らかに……貴方様に……寵愛頂いた事、忘れません」

少々ポロポロではございますが……ペースが落ちた後からは快樂の強さも減って調子を立て直す時間もございました。

骸になられた職員様を一度失礼して退かし、立ち上がる。

……乳房が異様に大きく成っていますね、胸元を何とか隠そうとしても先端を引っ掛けることも成りません。

臀部もそうでしよう、なんということか……メイド服はもちろん汚濁に塗れご奉仕すること俣なりません。

「……これは、貴方様が生きた証ですね。お預かりして行きます」

職員様の上着ポケットから手帳が。

少々拝見しますと緩やかに理性が奪われていつているのが伺えました。

この様になられたのも本意ではないのでしょうか……では、何者かに操られているのか

……

それとも悪魔が取り付いていたりするのでしようか……

「全てが終わりましたら……戻って参ります、今しばらくお待ち下さいませ」

幸いにしてこの手記に記されている事で断片的ながらに……このお屋敷は手遅れなのが分かりました。

恐らく私も遅かれ早かれ同じく狂気に吞まれるのでしよう。

結構、であれば一人でも多く生ける屍同然となった職員様達をお救い致しましょう。

最早死後すらも冒流されることでしょう……早急にその身体を休ませ安らかな眠りに導いて差し上げましょう。

この身がどれだけ貴方様方に犯され白濁を受けようと、最期の手向けの一助になるならば喜んで。

「一度部屋に戻りましょう、応急処置をしませんと……」

メイドも万が一の時には戦闘要員となれるよう武器装備は整えております。

さらに言えばこの今の状態では乳房が丸見えで淫売そのものでございましょう。

最期に見せる姿ではございません、早急に応急処置で何かしら隠す手段を講じましょう。

その為にも一度私の私室に戻りまして準備を整えましょう。

頭の熱も身体の熱も冷え切りました。

こうした元凶はどこにあるのでしょうか？外部の者であれば地獄の縁まで追いかけて行きましょう。

元凶が……ご主人様であつたとしても……これは承服しかねる事態。

であれば……メイドとして一度説得しなければなりませんね。

付き従うだけがメイドではございません、時には手を引き諭すのもメイドの勤め。館は昏く静かで……空気が死んでいました。

私室に戻るとまず着替えまして……おもてなし用でメイド服の中でも特に畏まった物。

胸元は一切開いていない貞淑で凛冽なメイド服……こちらを持ち出しました。

一ヶ月単位で試着しては胸元のフィッティングをしていたのですが残念ながら胸元はもう入りません。

エプロンで隠す上に申し訳程度に急拵えで用意したサラシ巻きで誤魔化しましょう。

これで見えた目上は貞淑なベルファストのままでございましょう。

手には手袋だけではなく……鋼のガントレットを装着。

過剰かと思われませんがこれが必要だと私のメイド魂が叫ぶのです。

武器は……これで良いでしょう。

L I A 1、一般的にはF N F A Lの名で知られる自動小銃。

今の私の故郷、英国の正式採用小銃でございませう、私のは肩掛け用のベルトのみが装着された物になります。

マガジンはエプロンの裏、腰に巻きましたベルトにつけたマグポーチに。

……怪我人が居た場合の治療薬等も携行しておきましょう。

こちらにも腰に、直ぐ様取り出しやすいポーチに。

これで準備は出来ました、では参りましょうか……

外は……おや、電気が一部戻っています。

何方かがそうしたのでしょいか？

ガシャンと音を立てたのはどこからでしょうか？

何者かが館に侵入したのでしょいか……招かれざる客は速やかにご退場願います。

唯でさえ今の館内は……地獄なのですから。

しかし、館は大きく見回りしなげらとなれば……私一人であつちこつちと行つても時間が足りませぬ。

道すがら……ここが地獄の一丁目と化している片鱗を見ました。

あの巨大な蔦に做つてか……巨大なハエ、巨大な蛾、蜂……昆虫類がどうも巨大に膨らんでいたのです。

無論全て撃ち落とす形で排除しましたが……それら全て私を見るなり生殖器を腹から出していました。

職員様の死体や他の従者達の死体……それらを貪っていた時とは明らかに挙動が違っていました。

窓ガラスを割って侵入してきたのはこれら昆虫なのでしょうか？

……遠くで聞こえていた犬の鳴き声も聞こえなくなっていますね。

これら昆虫の化け物に食い散らかされてしまったのでしょうか？

「穢らしい……全て終わった後には大規模なお掃除が必要ですね」

撃ち殺せば緑の体液を血のように垂れ流し館の内装を汚していく。

その死体もまた酷い臭いを撒き散らし……さらなる昆虫を呼び寄せるのです。

そして私を視認したならば生殖器を垂らしながら接近を試みようとする……悍ましい事です。

？
そういうえば……結局、あのヒルの集合体であったマークス様は……どうなのでしょう？

偶然ああなるとは思いません……再び相まみえる事がありましたら、どうしましよ

う。

正直な所引き金を引くことは出来かねますね。

「このマガジンは替えておきましょうか、残りが2とは……」

メイドの業務ではございませんので銃の扱いはあまりよろしくありませんね。

残弾管理も少々覚束ない、慣れる他ありませんが……元が斯様な事と無縁な日本の小市民。

扱えるだけまだマシ……でしょうか？マガジンを交換し……？

この音は何でしょう？トントン……軽いような重いような……

「ッ……」

ダンダンッ！ダンッ！！

目の前に降りてきたのが正体、でしょうか。

人をかろく押し倒して覆い隠せる程巨大なタランチュラ。

警告色の体毛が……非常に生理的嫌悪感を催す形状に悲鳴が出そうになりました

……！！

全身がゾワつとききました、ゾワツと……

コチラを向いていましたのでほぼ敵対していると見て撃ちましたが……

思いの外あまり生命力が無いのか……その数発でひっくり返り……

「……………これだから蜘蛛等の昆虫類は嫌いなのです」

その死に際の行動もまた……………非常に嫌悪感が拭えません。

ワサワサと足を蠢かせて……………うう、悪寒が止まりませんね。

焼いて消毒したい所ですが……………今はその余裕ありませんね、先を急ぎ……………

脇を通り再び隔離エリアに戻ろうとした時でした。

今しがた殺した蜘蛛の腹が破裂し、中より拳よりも大きめの蜘蛛がドバつと出てきたのは。

「くっ……………」

咄嗟のことで呆然としている合間にも私の身体に群がってくる蜘蛛達。

一匹、二匹……………次々に足に這い上がってくる感覚はおぞましく……………振り払っても振り払ってもキリがありませんでした。

一部は高く跳躍して胸元に直接来るので……………手ではたき落として踏み潰す。

そうして対応に集中せざる得ない状態に成ったのが非常に不味く……………

ドンツ

「はうっ!? ツ……………」

いつの間にもやら背後に降り立っていた大蜘蛛に押し倒され四つん這いにさせられ

……………

耳元にはギチギチとイヤな音……視界の端に移る強靱で大きな顎……そしてスカートを捲り侵入してくる生殖器が……

ショーツ越しに臀部に擦り当たる生暖かくねっとりとした物が物語るのは……

私はどうにも……化け物に欲情され慰み者にされそうです。

肩も下顎になる腕にしつかりと抑え込まれ……抵抗はできそうにありませんね。

「主人様……お許しを……」

絞り出した私の言葉は震えていた上……口にしてしまえば……視界が滲むのを耐えられなかったのです。

ずちゅ♥ずちゅんっ♥たぶたぶ♥ぼよんっ♥

「ツ……ううっ♥♥」

自重を支えるのに必要なのは4本の足だけなのか……残り4本は私のお腹を抱きかかえ……そのまま蠢く生殖器を膣へと叩き込んできました。

器用にも生殖器の先端でショーツのクロッチをずらすという……妙な知性を見せて

……

身体は動かない、ただただその肉塊のような生殖器を抽挿されるだけ。

激しくもない、それでも尚……私の膨らんだ胸は揺れ弾み……過敏な膣は悦び締め付

き……

未だに職員様の精液が入っているでしょう子宮が疼き始めるのです。

こんな……化け物蟲にも反応してしまうのはなぜ？精神面では全面的に拒絶したい所存なのですが……！

硬すぎず柔らかすぎもしない生殖器に奥をつつかれると……絶頂しそうなほどに快楽が駆け巡るのです……！

乳房からも……これでもかと母乳が溢れ、その母乳を求めて小蜘蛛が群がってくるのです……

揺れてはそれらが振り払われるのですが……その、感覚も……っ♥

ごぶんっ♥

「ツ！い、イヤです……！そんな、そんなのは……イヤ、イヤッ……イツツツ♥♥♥」

生殖器、密着した臀部から伝わる不気味な揺れ。

生殖器の先端が膨らみ子宮に密着したではないですか……この反応と揺れ……

それから射精されそうなのだと感じたのは間違いではないでしょう。

ただ辱めを受けるだけならば唇を噛んで耐え忍ぶ事できませんよう。

ですが……子種を腹に受けるとなれば……それは耐えられません……！！

メイドでもなんでもない……私の本心から泣き、ジタバタとしますが……

どっぶんっ♥♥

「あゝ あああああああっっっ!?!?!?♥♥♥……あ……ああ……」

そんな私の拒みなど知らぬと……下腹部に熱を籠もらせる精液のボディブローを受け……

屈辱に満ちた絶頂を味合わされ……絶望と脱力感に見舞われ……

にちゆにちゆ♥たぶたぶ♥

「あっ……あ……」

大蜘蛛が満足するまでか……小蜘蛛が満足するまでか……私は犯され続けるのでしよう。

絶望感に咽び泣くこともならず……力なく、喘ぐしかありませんでした。

揺れるメイド

キィ、キィ……耳に付くのは小グモの鳴き声。

正確には顎の蠢く音でしょうか……恐らく、そうだと思うのです。

大蜘蛛は私を犯しぬくと満足したのか……何かあるのか……私を置いてそそくさと何処かへ行きました。

凌辱されお腹に精液を叩き込まれた私と……お腹を空かせた小グモを残して……糸で拘束されなかったのは良かったのですが……

「ふっ……ふっ ♥ ♥ んんっ……♥」

拘束されずとも私は今……全然動くことも叶わないほどに衰弱しきっているから、です……

快樂によつて喘がされ続けた私は体力をかなり消耗させられ続けていたみたいです。少なくとも、私が想像していたよりもずっと……セックスでイキ続ける事はヘビーでした。

卵を産み付けられたりしなかったのは幸運なのでしょう……

それとも私はこの小グモの母胎となれという……そういう事なのでしょう……

どちらにしても私は蜘蛛の従者ではございません……体力が戻り次第……
かりっ♡

「んんんっつっ♡♡♡」

それは許さないと一言わんばかりに小グモが乳首を噛むのです。

そう、私の急拵えで整えた衣服……言ってしまえば露出しているも同然な胸元に潜り込まれたのです。

エプロンとサラシ、その二つで防ぎきれるかと言えば……防げません。

母乳が滲み乳首の場所は容易に特定できるので……それで、サラシの上からカリカリと……

足が食い込む感覚も……それも快楽になってしまっている。

これではマトモな体力に戻るまでかなり時間を要するでしょう……

……なぜ、この小グモは私の母乳を求めなのでしょう？

蜘蛛はどちらかと言えば肉食、タランチュラもそういう物だったはずですが……

かぷっ♡どくんっ♡

「ツツ♡♡ほ、おお……♡♡」

し、思考を乱すように不規則に噛みついてくる……

その上、乳首になにか流し込まれている様にも思えます。

これは、一体何なのでしょう……♡

な、何であれ……私は耐えて……一人でも正常な方を見つけるか……外部に助けを呼びませんか……！

歯を食いしぱり快楽に押し流されないように……できるでしょうか？

いえ、やってみせましょう……メイドの誇りにかけて……！

なんとか、耐えきって小グモを払い落とす事には成功致しました……

ですが、その間にも私の乳房は変貌を遂げ……サラシも破損し……エプロンの胸元は谷間に吸い込まれる始末。

サラシを再び巻き直しましたが……今度は乳房の上下が見えてしまいますね。

……汚れるのはもう覚悟の上でしたが……それでも誇りあるメイド服がこうして穢されるのは堪えますね。

目立った汚れはスカートに付着した蜘蛛の精液……事が終わった後しっかりと洗濯しましょう。

「はあ……ふうっ……♡まだまだ、快楽の余韻が残りますか……」

どれだけ身体を落ち着けようと深呼吸をしています……残念ながら身体に籠もった熱は引かない。

それどころか段々と増加しているの感じます……どうしようもないのでしょうか？

……乳房は乳房で重く、ずっしりと……熱以外の弊害が大きく……

「ふう……ふう……屋敷の中は散々ですね……マスターキーを拝借しに行きましようか」

メイドに任されている範囲の鍵は持っています。

しかしながら屋敷は広く幾つもの知らない区画がございます。

寄宿舎の奥深くや中庭の一部等……そちらに生存者が残っている可能性もございません。

今の私がすべきは化け物の処理、生存者の搜索……さらには外部への救助要求でございますね。

電話線は全て破断されていて外部への連絡手段は断たれていますので……

その連絡手段を探しに行こうかと……何らかの通信手段があると推測します。

緊急で必要になった生活雑貨を直ぐ様取り寄せて貰った事もございます。

他にも定期的に必要なもの以外の物品も的確に補給されていましたので……

何かしらの通信が無ければ説明が……私が見たことが無い区画の何処かにあるのだと……

それを探すためにもマスターキーを拝借し搜索もしたくあるのです。

道中は険しく……その途中でまたも辱めを受けることは避けられないと思います。「……それでも、やるのみ……ですね」

意識を引き締め……可能な限り化粧物をお掃除して行きましようか。

屋敷のマスターキー……騎士の鍵、管理自体は館を預かる身である保安部長がしていたはずですが……

権力の一極化を防ぐためと鍵の存在は私に委ねられていました。

実質的なメイド長を勤めていた身ですのでその信頼というのは感動したものです。

しかし……私の私室に置いていないのは防犯の観点からでございませう。

定期的に私が確認出来て私以外が見ないような場所……そう、キッチン周りに隠してあるのです。

他の従者というのはベッドメイキング、衣類の洗濯……正直言えば人数合わせにしかならないのです。

食事を用意するにしても量と質、これを両立させるには……私一人で切り盛りするほうが良いものであります。

ですので他の方はやんわりとお断りし、このキッチン周りを私の根城としてしまったのです。

……件の鍵は……ありました、これで館内の搜索は容易でしょう。

これで館内のカギ付きの扉は開閉可能でしょう。

どくんっ……どくんっ ♥

「ツツ♥……か、身体が……？」

落ち着いたと思った身体の疼きが強く……胸の熱さも復活して……

いきなりのことに困惑……してしまったのがマズかったです。

立ち止まってしまったのが外部と接続された通風孔の付近だったのです。

「はっ!？」

ガシャンと音を立てて飛び出してきたのは……幾つもの細長く鱗をもった……蛇と

形容して良いのか分からない異物でした。

一つ、二つといくつも飛び出してきて……私の身体に飛びかかり……

頭とも言えない口、そしてあからさまな生殖器をもたげてきたのです……

身体が疼くのは……化け物が近くにいる証拠、なのでしょう……

そしてこの蛇?の化け物もまた……私の乳房と膣にご執心なご様子。

太さは私の手首程度でその力強さはかなりのもの……振り解こうともがくのですが

……!?

びりっ♥ばるんっ ♥

「ツ…………よくもっ……………あああつつ♥♥」

幸いなのはこの化け物が片手で数える程度の数しか居ないことでしょうか。

そして……………牙も何もなく……………ただただ力強いだけ……………

その力強い啄みにサラシが引き裂かれましたが……………もう、良いでしょう……………

私の乳房はもう見るも無惨な程に淫らに……………巨大に膨らんでいたのですから。

そしてその乳房に口が吸い付き……………搾乳されれば耐え難い快楽が襲い来るのです。

崩れ落ちた私を良いことに……………そのまま生殖器がスカートの中へと潜っていきまし

た……………

溢れる涙はもうありません、化け物による凌辱はこれで二度目……………

それに身体が求めてしまうのです……………この、苛烈なまでの……………

ぢゆうううつつ♥きゅつぽんっ♥ちゅっ♥ちゅっぷ♥ぽんっ♥

にちゆにちゆ……………ずぶんっ♥ぐっぽぐっぽ♥

「ふううつつ♥♥んうううつつ♥♥んんつつ♥あっ♥あああつつ♥♥あ

”あああああつつ♥♥♥”

雌として使い潰されるような……………一方的で暴力的な快楽を……………

乳房を搾り上げられながら何度も何度も乳首を吸い上げられ音を立てて外されては

また……………吸われること。

膣に競い合うように次々に突き入れられるペニス……その快楽に、私の身体は屈して
いたのです。

……その快楽にやられつつあるのは……否定できませんでした。

私は、誰のメイドであるべきなのでしょう……？

姿を拝見したこともないスペンサー様？あの化け物として現れたマーカス様？

それとも……私に性欲を向けられる皆様……なのでしょう？

抵抗にと握った乳房に食らいつく頭も……引き剥がそうと、しているのでしょうか？

まったく、力を入れること叶わないのです……

摩り撫でるようにその表面を滑らせるしか出来ない私は？

ごりゅごりゅ♥くりくり……どぶっ♥

ああ、この蛇にも……中に♥

注がれる情愛の雫に理解すると同時に襲い来た本能の悦びに絶頂し……ぐったりと
……倒れ伏したのです。

従者と人の相棒

絶頂に絶頂を重ねることに嫌々ながら身体が慣れてきた……とは言えませぬね。

あの蛇達は出すだけ出して……私の胸を搾り取ってはまた通風孔に潜っていきました。

後に残された私はまたしばらく床で伸びる他にありませんでした……

この暴力的な快樂に慣れることは……それ即ち異形に与えられる快樂に屈したと同然だと思いません。

少々メイドのプライドというものが揺らいでは居ますが……まだへし折れる程では、
ごさいません。

……正直に申し上げればかなり辛く泣きたい所でごさいます。

メイドという鎧にヒビが入っていつてるのです……自覚するほどに……

女として生きることと許容しきれていなかった頃から身体に引つ張られメイドの所作が出来上がっていたのです。

ならば、ならば侍女として生きることと己を補完しメイドとして役立つ自分を褒めよう。

そうして私のメンタルはベルファストというメイドにシフトしていった……と記憶しています。

自分に何も残っていないならば……今の身体で一番しつくりくる事を極めて……女としての幸せ等放って置いてメイドとして生きて墓に入るのも良いかと、そう思っていましたのに。

今はどうでしょう……人間として、女として非常に苦しい状況が続く。

メイドの業務に逃げて褒められ時折情の入ったお手つきもされますが……それはまだ、許せました。

慣れてしまった後はそれが喜ばしいまでありました……ですが、今は……それも出来ない。

それが許されない状況で……ただただ身の毛がよだつ悍ましい怪物に犯される。

身体も……見るも無惨、97と大振りに実った胸は更に輪をかけて大きくなり母乳まで滴っている。

私の……私の尊厳というのはどこにありましたでしょうか？

ゾンビ化した元職員様はまだご奉仕する意義はありますでしょうか？

ですが、他……マークス様の意思を感じれないヒルの大群、大蜘蛛に小蜘蛛、異形な

蛇……

犯されれば犯されるほどに身体は後戻りできかねない程に……変わって……
「もう……はあっ……♡うんざり、です……♡」

身体が変化する事、異形に強姦されること……どちらか一方でしたら耐えられたかもしれません。

……存外、もう少し犯されれば慣れてしまうのかもしれませんが、慣れてたくはないです。

どうせ女として犯されるのであれば人間に限りたかったです。

気持ちを切り替えて化け物もご主人様と認識したら気持ちはとても楽になるでしょう。

限界に近づいた時私は……プライドを捨ててご主人様と認識し媚び諂うのでしょうか？

「そんなのは……嫌、です……」

私の心が生きている間に、ここから脱しなければなりません……

快楽に流され続けければ……私の心は死ぬことでしよう。

どくんっ♡

「ツ♡はあっ……♡ま、また……♡」

身体が、いえ……子宮が疼くのです。

強く、強く……雄の子種を求めている、それを自覚させられる。

お前は浅ましい雌に堕ちている……そう身体から言い聞かされているような気がしてきますね……

疼くということは……私の付近にまた化け物が居るのでしよう。

まだ、私は動くこともままならない状態……詰みですね。

ドンドンとキッチン戸が殴られて……今にも破られそうですね。

他の化け物なのか……それとも……ゾンビと化した何方かなのでしょうか？

なんとか……体勢をと思っても不格好な四つん這いが限界。

これでは獣に犯され待ちをしている変態女、ですね……腕を突っ張っているのも、辛いとは。

程なくしてドアが蹴破られる。

その正体は犬……犬舎から脱走したという情報もあつた犬でした。

番犬として飼われていたはずのドーベルマンは……なんとも無惨なお姿に。

勇ましくも何処か愛嬌を感じていた面構えは肉が削げ落ち……頬は無くなり牙がむき出しに。

そして……今までの化け物と違いなくペニスは臨戦態勢。

乱暴にもスカートは噛みちぎられ……精液で汚されている事でしょうショーツも同じく噛みちぎられました……

ビリビリと、ただ引き裂かれるのを聞くしかできませんでした……

私を犯すつもりで今ここに居るのでしよう……そして、そのペニスの香りを嗅ぐと……身体がっ……♡

体力が戻りつつあった身体が一気に疼きによつて麻痺していく。

身体から余計な力が抜けたのもあつて……犬のペニススルリと……

「——ツツ♡♡」

メス犬と挿入されるメイドは……犬畜生の相手がお似合い、そういうことでしょうか……？

器用にも前足でしっかりと私の腰を抱くと……カクカクと腰を振り始めた。

その大きさは大したことも無いというのに、挿入されるだけでこんなにもイクようになってしまいました。

膣の中腹程度をカリカリされるだけで……イク、クソザコマンコ……♡

悔しくなると同時に……快樂に絆され、少々幸福感を得ている私がありました……

四つん這いの腕も力が抜けがつくりと地面に顔が……

床に広がる私の母乳や愛液……そして化け物の精液が頬に……凌辱の跡がまた私を

苛む。

へこへこっ♥ずっちゅずっちゅ♥

「ほおっ♥おあああっ♥あんっ♥あああっ♥」

最初の大波が過ぎれば……少しはマシでしょう。

しかしながら私の身体も心も休まるヒマもなく快楽に晒され続ける。

人の緩急あるセックスとも……ゾンビ化された殿方との力強いセックスとも……ぜんぜん違うセックス。

ただただ只管に腰を高速で振り続けてコチラの性感を刺激し……喘がせてくるばかり。

「ほ、ふ……あ、いや……そんな、そんなのは……嫌です……イヤ、いやあ……！」

背中に感じていた圧がなくなり……変わりにくると回転するペニス……

ペニスが回転？そしてお尻に当たる……ここまで来てようやく察しました。

射精体勢に入った、一番奥深くまで突き入れて精液を吐き出そうとしている。

それを悟って快楽によってあまり力が入らない足腰で逃げようとするのですが……

巨大になりすぎた胸が足かせになり逃げることも叶わず。

どぶどぶ……♥

「うああああ……あ……あああ……♥」

犬の……異形化した犬の精液をお腹に受ける屈辱を、味わい……

その上しつかりと犬の特性を残しているのか……抜く様子もなく……

膣の中で異常に膨張する……私を確実に孕ませようとしているのでしよう……

カクカクと腰を振らずとも出てくるのでしよう……まだまだ、まだ……と射精はト口ト口と続く。

膣はもちろん子宮の中に強引に押し込まれていく精液は逃げ場を求めるのですが

……そんなものは無くなり……

メイド服の腹部を徐々に盛り上げていくのでした……

その絶望的な感覚に涙し、喘ぎながら……両手を悔しきで強く握り込むしか……ございませんでした。

挿入があまり長くなかった為に体力の消耗は少なくりましたが……今度は物理的に動きづらく……

犬が満足するまではこのまま……私は犬とつながって居なくてはなりませんね……

つい、数日前までは幸せに、誇りをもってメイドをしていたとは……思えません。

なんたる……転落でしょう……

とくん、とくん……

疼きでもない、なにかイヤな……胎動が腹の奥底で感じた気がして更に悪寒を覚え
ました。

まさかと思っていたのですが……妊娠など、していたら……

「うっ……くっ……」

嘔り泣くしか、弱いメイドにすることは出来ません……怖いです、恐ろしい……
化け物の母など……嫌です……！

そんな私の思いとは関係なしに……下腹部のその胎動は徐々に徐々に強く。
明らかな命として私に意識させてくるのでした……

メイドは識る

ペニスという栓が抜かれ、私に種付けを行った犬は駆けていきました……
ぐうぐうとお腹を鳴らしていたので空腹なのでしょう。

その空腹を満たすのはどうするのでしょうかね？

飼育員はもう居ないでしょう、餌も枯渇したとかそんな言葉を隔離所で耳にした覚えがあります。

それどころか……飼育員が暴れていたのを見た覚えもあります。

この館内に居た生きとし生ける物全てが化け物に変容しているのでしょうか？

残されたのは……私だけ？

とくん……とくん……

「ふう……」

下腹部に感じるこの胎動もまた私の心を蝕んでくる。

孤独感に苛まれる中感じるこの望まない妊娠……せめて職員のだれかの子であれば良いでしょう。

ですが……私を犯し子宮に精液を吐き出していった生物は多く……その全てがあり

得ないほどに多く吐き出していききました。

あり得ないこと続きで異種の子を孕んでしまっていたら……そう考えてしまうのです。

一度思考に入り込むとこびりつき離れてくれず毒のようにジワジワと精神を蝕む。

非常に……イヤです……

精液を叩き込まれながらも犬が張り付いていたからか……

他の化け物に襲われることもなく今はキッチンを離れ脱出や救援要請の手段を探しに戻れています。

身体を動かし続けることが今できる最大の精神防衛手段です。

誇りのメイド服もスカートを破られ……胸は大きく露出し……貞淑さの欠片もない状態。

今の私を仮にご主人様に見られてもしたら罵られることでしょうね。

ですが……心持ちだけはメイドたれ、マスターキーを拝借し探索を続けています。

理性を持ち生存されている何方かに遭遇しても良いように振る舞いましょう。

部屋に入る前にはノックを致しまして……返事を待ち……数秒しても返答がございませんでしたら……

「失礼致します……やはり誰も居なく荒れ放題ですね」

一言お断りを入れて部屋に入ります。

館の豪華な造りに沿ったお部屋、ここは保安部長様のお部屋になります。

普段は立ち寄ることも禁じられお掃除もさせてもらえなかった始末でございます。

中は酷い有様でバラバラに引き裂かれた書類、床に散らばった血痕、腐臭……

そのどれもが此処でもゾンビ化された職員様とそうでない職員様との戦闘があったのでしよう証拠ですね。

乱雑に散らばった書類を拾い集めてみますと……その内容に少々、信じ難い事が並べられています。

「B・O・W……生物兵器対処レポート……？」

私が間接的に仕えているアンブレラのマークが刻まれた書類でした。

……もしや、もしや……今ここで起きている化け物騒ぎは……？」

信じたくない、確認したらいけない……そう逃げたくもありませんが……震える手はそのレポートを……

ひいてはその他の書類に手を伸ばし、一枚一枚……確認できる部分を見ていったのです。

断片的ですが……アンブレラという会社が行っていることを知ってしまいました。

信じ難いことにご主人様であるスペンサー様もこれを認知していて尚止める所か推

し進めていた……とは……

「……私、は」

そんな絵空事のような外道が私のご主人様だった……と？

書類が散らばる中私は呆然と……へたり込む他ありませんでした……

健全な精神であればそれを飲み込みアンブレラという会社を、さらには主人であるス
ペンサーを正しに行く所であっただろう。

しかしながら、ヒビ入ったメイドの心にその事実は致命的でヒビ割れは全体に波及し
……絶対であったメイド精神も崩れていく。

麗しいその顔を曇らせ次々に書類を読んではその顔を歪めていく。

自分達は捨てられ、その実験対象にされている、そう認識すると……ベルファストの
中ではもう、奉仕精神よりも……

ただただこの地獄のような館から脱出して真に仕えるべき相手を探したい。

そんな逃げの気持ち支配していた……化け物の嫁になるつもりもない。

今この時より、ベルファストはアンブレラのメイドという枠から逃れたのだ。

最早、私は何のためにメイドとして奉仕していたのか……それが理解らなくなりそう

です。

ご主人様と思っていた方はとんでもない悪魔、外道と言って良い。

私の処遇もこの書類に記されていました……

「……私はもう死んだ扱いですか」

保安部長にあてられたFAX文章にあったのは……当館の職員全てを利用したB.

O・Wの戦闘データ取得指示。

それと実験していたという証拠の根絶を指示していました……つまりは全員死んでもらわなければ困るといふもの。

ここでこれら書類を受け取っていたのか……と思いましたがそれも違うご様子。

電話などは無く通信機器は別。そして何より残念極まるのは……

「貴方は早々にお逝きになられたのですね……卑怯者」

身体を貪られれば骨と化している死体。

右手に握られたハンドガンと頭の出血……その死体は保安部長の物でした。

何をお思いだったのかは存じ上げませんが……手記も見ると限り支離滅裂。

こちらの資料で言うウイルス罹患した上でゾンビと化すのを嫌ってこうなったのでしよう。

自分は違おうと傲慢にもお思いだったご様子ですが……最期は逃げですか……

腹が立ちますが死体を愚弄するつもりはございませんので……せめて、地獄で責め苦に遭うことを祈っておきましょう。

「ともすればこの館から出るにしてもこの道を徒歩で行くしかなさそうですね」

アークレイ山地を徒歩で下るのは困難ですが……他に手段がありません。

ですが……その出るのにもなにか証拠がありませんとアンブレラの一方的な言い分に揉み消され……

折角生き残つてもどこかで消される事でしょう、となれば……

「この研究所とやらに一度脚を踏み入れなければならぬそうですね……」

人の悪意とその産物の巣窟に向かわなければならぬ……私の心には深く重い泥が沈着するのです。

この館は設計からして複雑怪奇、設計者も金をかなり積まれ伸び伸びと制作したそうです。

その結果、一度仕掛けを間違えると即死しえる物が多くあります……

今思えば侵入者対策として設置するにしても……過剰とは思っていません。

スペンサー様の資産はかなりあるでしょう、それを護るためかと思っていましたか

……

まさか護っていたのは己の暗部とは思いませんでした……

「今楽にして差し上げます、大丈夫です……痛みはもう、感じないのでしょ……」

携行火器としては大口徑に分類されるL・I・A・Iを携えて館内を搜索。

その道中には数多のゾンビ、B・O・Wと思わしき化け物が多数。

胸はあり得ないほどに大きく、B・O・Wが近くに居ると疼く身体……そのハンドは

もう良いでしょう。

敬意を見せる必要も……もうごさいません。

ゾンビは頭を撃ち抜けば、B・O・Wもその特性は変わらず……容易に突破できるか

と思っていました。

それは、中庭を横切る際に飛び出してきました。

「なっ……くああああっっ♥♥」

乳房で遮られ下方向への警戒はどうしても薄くなりがち。

その上中庭は暗く……地面を良く見ることは出来ませんでした。

勢いよく飛び出してきた大きな口つきのミミズと思わしき化け物は私の胸に吸い付

き……

両胸が塞がれば大きく裂けたスカートの奥底、膣に食らいつき、吸い付いてくるので

した。

動くことままならない程に大きな快樂が押し寄せ……中庭、外に声が漏れかねない……

他の化け物を呼び込みかねない状況で……私はへたり込み、無様にも化け物に母乳と愛液を捧げる事になりました……

「ふっ♥ふううっ♥くうっ♥はなれ……ふうっ♥ああんっ♥」

両胸は乳輪を覆い尽くされその内部でうごめく舌でもって乳首を……

包み込まれる乳肉は柔らかな歯で刺激され……勢いよく母乳を搾られていく。

両手でつかめば……逆に腕にその細長い身体を絡まれ気持ち悪さと快樂に力が抜けていく。

膣の方は単純な強い吸い上げで……私を無力な雌に墮とすには十分過ぎました……

「はっ♥はああっ♥♥♥そ、そちらは……おほおっ……!?!」

餌となる私、十分に吸ったミミズは離れ、次のミミズが空いた箇所へ飛びついてくる。

そして……膨れたミミズは逆側の尾を私の尻タブの奥、アヌスの奥へと入れてくるのでした。

……私は、全身使われていくのでしようか……いや、なのですけど……

感じるこの快樂に逆らえない、長く味わえば味わうほど……その強烈な味を覚え……
抜けられなくなりそうで……

また、身体の奥底がドクンドクンと疼くのでした。

不可逆の傷

大いにうねり跳ねるミミズの化け物に身体を食られ絶頂する屈辱の最中……私の秘所には生暖かな液が注がれていました。

他にも出すばかりと思っていた尻の奥もそう……液体に合わせ柔らかな粒……恐らくは卵を産み付けられてしまったのでしよう。

お腹はかなり、苦しく……ずっしりとしてきました……

「は……ふ……ふ……♥」

どれほど喘ぎ泣きメスとして使われたことでしょうか？

もう髪型などボサボサでメイドとしても……イチ個人としてもお見苦しい限り。

それ以上に肉体がお見苦しい醜態になっているのですが……

メイド服は最早エプロンとヘッドドレスのみが原型をとどめているに過ぎない。

胸部は元より閉まらず……スカートは引き裂かれ、腹部は今無惨に裂けてしまっているのです。

私を絶望に叩き落とす物が腹部に出来上がっていたのです……

丸まると飛び出た私の腹です……妊娠線が出てしまっているのも含め私に致命的な

精神ダメージを負わせる。

ドクドクと胎動していたモノがついに……と思うと同時にありえない速度の生育に怖気が走る。

どんな生態系ならこんな数時間と経たずして……体感でしかないですけど一週間もかかっっていないはず。

それなのに……私のお腹には確かな生命の胎動があった……

お尻から注がれた卵もまたかなりの量だとは思いますが……ここまでなることはないでしょう……

あのミミズはそう、大きくはございませんでした……精々が私の腕程度の太さに上半身程度の長さ……

薄っすらと覚えているのは搾乳イキし続ける私を後目に……丸まる太ったミミズが地面に潜っていく姿。

庭より見上げる夜空には月が見えて地面に横たわる私が余計に惨めに思えてくるのです。

私の喘ぎは近隣に響いたことでしょうか……化け物が私を犯しに来るのは分かりきっています……

妊婦だろうがなんだろうが……化け物にとっては些細なことでしょうか。

私を犯して母乳を啜り……辱められればそれで良いのでしょうか。

「……願うなら数週前に戻りたいものですね」

セクハラを受けながらも充実していたメイドの毎日。

……残念ながら現実逃避もあまり出来そうにございません。
身体の疼きは強く近くに件の化け物は多く居るのでしよう。

そして……腹の胎動も強く不気味に蠢くのを感じるのです……もうすぐ産まれ落ちる事を予兆させる動き。

これを無視するには……私の身体は敏感すぎて無理でした。

キイキイと鳴くのは何でしょう？

意識をそちらに向ければ……月が浮かぶ空、月のシルエットに差す黒い物は……

「ふ、ふ……私はコウモリにすら発情されているのですね……はっ……はぶ……」

見えるシルエットは疫病を撒き散らす災厄の象徴。

吸血鬼のモチーフにもなる……コウモリでした。

異様に大きく、身体だけで私の巨大化した乳房に迫ろうかというサイズ。

一歳児に近い……こんな大きさのコウモリが数匹……お互いを牽制しあっているのかその軌道は不確か。

……下腹部から飛び出ているペニスを見るに私を犯そうとしているのは間違いないですね。

「痛い目は見ていただきましょう……!」

地面に落としたままだったL I A Iを手繰り寄せて空より飛来するコウモリの軍勢に照準。

あまり……よく狙えてはいませんが……引き金を引く。

静まり返っている夜に響く銃砲の音、強烈なマズルフラツシユの後に飛び出る鉛玉はコウモリの一体にヒット。

ラツキーショットと言えばそれまでですが……よくお理解りになられたかと。

私はただ犯されるだけのメスではございません。

その矮小な頭でもしっかりお理解りになられた所で……土に還って頂きましょう!
「っ……」

ただ、発情しきった私の身体は……銃の発砲で身体が揺れるだけで酷く疼く。特に子宮には変な伝わり方をするのか……一発、一発の反動と同時に疼くのです。乳房からも母乳が溢れて……ああ、なんて……惨めなんでしょう。

人の気配が消えてしまった館に響く銃声はそう長くは続かなかった。

一発、一発……快感に悶ながらも引き金を引き続けた。

その結果群れを成していたコウモリの間引きには成功しました。

しかし……殲滅には至らず……私の身体に取り付けさせてしまうのを許してしまいました……

奇しくも……2体、私の両胸に取り付き母乳を吸る……

「あああああ……♡♡♡」

快楽に全身を支配されるのはもう何度体験していることでしょうか？

ただただ母乳を吸るため乳房に吸い付かれるだけでこの有様。

自分で考えられないほどに身体は貞淑から真反対の方向へ進んでいくばかり……

もう……引き剥がそうとする事も出来ず……されるがまま。

——どくんっ……びくびくっ♡♡ぶるるんっ♡
「ツツツ♡♡ふぎぎゆううつっ?!?!?!♡♡」

お腹から激痛が……一瞬だけ私を現実に引き戻し……

そしてまた快楽が私を彼方へと押し流そうとしてくる。

股はもう濡れきっている……破水したのかすら……分からないまま……

強い胎動と勝手に入っていく力、ただただ大きなモノが私の中から出ようとするのを

感じるので精一杯……

私のそんな激動は知らずコウモリは暴れる乳房にぴったりと張り付いて……ちうちうと母乳をすすつていく。

それが今この時だけではありません。

きつとこの乳凌辱がなければ……私は泣き叫ぶ事になっていたでしょう。

ですから……今この時だけは、この化け物に好き勝手身体を弄ばれる事を許容しましょう……!

決して、快楽に負けたが故の事ではございません……

乳房に擦り付けられるペニスの感覚にイク淫乱がよくもほざく……何方でも良いです……

いっそ、私を詰り罵るだけの理性を持ち合わせたお方が居てくれたら……いいのに……

——キイ……キキ……

ずりゆつ……ぐっぽぐっぽ♥

「ほ、おおお……?!?!?」

イキ続ける私に対して搾乳もほどほどに……あろうことかペニスを乳房にねじ込む暴挙に出てきたコウモリ。

お世辞にも大きいとは言えないモノですが……乳首から内部に侵入するとなれば……それでも耐え難いモノに。

こんなに乳房をイジメられるのは考えもありませんでしたが……こんなに、感じるものなのでしょうか？

私知らないだけで、これが当たり前なんでしょうか？

そう思われるほど……私はこの快感を味わい続けている……

人間以外の化け物にこうも……ああ、イキ続けた結果でしょうね……股からっ……出てっ……!!

べちやつ……

「は……い……?」

とても胎児が出てくる感覚ではございませんでした。

もっところ……ゴリゴリと骨盤をえぐるように出てくるものだ……思っておりませんでした。

しかし感じたモノは……ドロドロ、ぶよぶよ……大凡普通の胎児の物ではなく……

『ギエエエエアアアアアアアア!!』

正しく化け物を私は孕み、産み落とした様子でした……

人生初となるお産が……よもや、こんな……

愕然とする私の……涙で滲む視線の先に映ったのは

人の口が辛うじて認識できるような悍ましいドロドロの肉塊でした。

耳を劈く産声をあげ、その全身をうねらせながら私の身体によじ登ってくる。

行く先は……ああ、やはり私の胸でございますか……

「あはっ……あはあぁっ……」

コウモリの化け物を呑み込むとそのまま私の胸を包み……強烈に吸い上げてくるのです。

神よ、これは……私という人間に対する試練だとも？

それとも……これこそが私の、ご主人様だと……でも……？

私の中の大事なものが崩れていく……クソがつ……私が、僕が……何をしようと、言うんですか……？

淫欲に折れる

私が産み落とした正真正銘の化け物は……コウモリの化け物を取り込み、咀嚼しながら……私の胸を包み、搾乳してくる。

その不定形な全身が蠢く度にゴキゴキとコウモリのモノでしよう骨がへし折れる音が伝わってくる。

中途半端に歯が生成されている口からは威嚇するように咆哮をあげて……他の化け物の接近を牽制しているんでしょうか？

……未だに信じ難いです、こんな物が……私の腹に入っていた、とは……

ですがその事実を物語る物が見えるのです……肉色のその軟体に接続した臍の緒と胎盤……

いまココに居る女体は私のみ……

「はああ……あ……あ……」

夢であれ、夢であれと願えど襲い来る快樂がその逃避を許さない。

絶え間なく搾乳され両乳房から迸る母乳の感覚が強引に現実を引き戻すのです。

少々……シヨツクが強くと地が出てしまったのは……自分でも驚きです。

14の時にこの自意識に覚醒した後、メイド養成学校で過ごす過程で不気味なほどに完璧なメイドとしての所作……

それに付随した奉仕精神に戸惑いながらも身を委ね……ベルファストという一介のメイドに仕上がった後……初となりますね。

……すこし持ち直しましたが、衝撃的な事が立て続けに起きていて未だ困惑が拭い去れません。

胸も……どこまで大きくなるうとしているのか……

幸いにしてシヨックが原因か、出産が原因なのか……快樂の強さというのが幾分減衰しているように思えます。

ただ私が慣れてしまったとしたら……それは由々しき事ですが……

誇りに思っていたメイド服も無惨に引き裂かれ、エプロンの上には化け物がべつとり。

引き剥がそうとするも怪力で抵抗され引き剥がすこと叶わず……

このまま探索したら……威嚇がいい具合に他の化け物を遠ざけてくれるでしょうか？

ちゅっぶっ ♡ちゅっちゅっ ♡♡

「……」

引き剥がしたい、こんな化け物を我が子等と認めたくはない。

この胸はこんな化け物に捧げるためにあるのでは無いのですが……

引き剥がせないのです……有効活用する他ありません。

今のところは私に危害を加える様子は……ありませんので。

種付けされなければ有情……等と思ってしまうのはもうこの状況に毒されていますね。

あまり慣れない手付きでリロードを済ませ……この屋敷のどこかにあるとされる研究所に足を踏み入れましょう。

この屋敷の奥深く、どこかに……奇想天外などこかに……

設計を担当された方はかなり独創的な仕掛けを多数仕掛けているのは承知のこと。

……中庭も一部侵入を禁じられていましたね。

そちらに向かえば少し何か分かるかもしれません……

広大な中庭には幾つかの水路であったり池があり……その奥があるご様子。

普段はその様子を見るだけ、お手入れに入るのも許されない始末でした。

「ハシゴを降りるのも……」苦勞でございませぬ……」

巨大になった乳房が干渉する……こんな事を体験する日が来るとは……

幸いにして素肌がそのまま……となっていないのは……

いえ、化け物に胸を覆われている方が不幸です……それにこうしてお腹がボコボコと……

「ツ!？」

カツンカツンとハシゴで下る最中何かお腹で……あ、衝撃で忘れていましたが……私のお腹にはまだミミズの化け物の卵がっ……!

直腸の中で孵ってしまったのでしょうか……今度は、あのミミズが産まれるのでしよう。

まだ、マシですわね……っ、どうせ……この化け物が食ってしまうのでしようし……! 水が引いた貯水槽の底、タイル敷の床に腰を降ろし……踏ん張ってみれば……降りてくるこの感覚……うねり踊り、跳ねている……!

「ふっ……ふっ……ふっ……♥」

それに異様に肛門で快感を感じてしまうのが……止まりませんっ……!

出口に対しては細い様子ですが……押し開き暴れながら出てくるのに際して……刺
激がっ

痛みこそあれど快楽を感じ得ないと思っただけに……これは、ショックですわ

……!

他にも快樂を感じ得ない筈の所で快樂を得るようになるかもしれない……

……出産の際、陣痛よりも快樂に苦しめられていたのを思い出してゾツとする。かなり快樂に染め上げられていると自覚させられるのです。

「……は、ふ……ちようど、離れ、ましたね……♥」

産み付けられた卵は残らず孵ったのでしよう……一匹産み落とした後もまだお腹に残っている感じが……

そして読み通り……胸に吸い付いていた肉塊の化け物は離れ……私が今しがた出産したミミズに喰らいついていく。

次々産まれてくる……ミミズを食らって……まだまだ食欲が満たされないのでしょう、他を求めて蠢いて……

どくんっ……♥

この疼き、近くにまた居るのでしよう、上の方から……ええ、這いずる音が聞こえてきます。

見上げれば……奥側のハシゴから数匹の蛇が。

私を犯したあの蛇もどきとはまた違う、正真正銘の蛇ですね。

「……今のうち、でしようか？」

少々危険ですが……蛇と肉塊が共食いをしている間に逃げてしましましょう。

肉塊の粘液でテカテカとしている乳房を見下ろす……大丈夫、だと思えますが……
……大丈夫そうですね、今のうちに奥へと参りましょう。

まだ化け物同士でやりあってる様子ですし……足腰が砕ける程の快樂を味わった後では……あの程度、なんてこと無いですね。

すこし遠回りするだけみたいですね……いつも通っていた場所に出てしまいました。

寄宿舎への通り道……寄宿舎の中にはなにかあったりしないでしょうか？

あの妙な植物もありますから……正直近寄りたくはございませんが……

各寝室のベッドメイキングに便所の掃除……浴室の掃除等に立ち入るのみでしたが

……

さらに奥は知りませんね……なにかあるかもしれない。

このような狂気に満ちてから二度目になる寄宿舎は……どうでしょう？

中に入れば……聞こえる聞こえる、数多のうめき声。

ゾンビとなった職員でしょう、疼き方からしても……近いですね。

もう、敬い慕う気はございません……撃ち殺して早々におさらば致しましょう。

「ご機嫌麗しゅうございます……」

……しかし心情とは裏腹に身体は染み付いたメイドの所作をしてしまいます。

もうメイド服も私のプライドと動搖にズタズタだと言いますのに。

一種の病気ですね、自虐的に思いますが……一種の礼儀と思ひましょう。

カーテシーをしてみれば……嫌というほど大きく実った胸がずっしりと揺れ……ため息が出そうになりますね。

ゾンビとなりました職員の皆様は一樣に股間を大いに膨らませ……私に迫ろうとしています。

その膨らみはとても大きく……

『あんっ♥あっ♥♥ああああっ♥ど、どうか♥ああっ♥♥お鎮まりを♥♥
あああああつつ♥♥♥♥』

「ッ♥」

脳裏にフラツシユバツクするのは……この狂気に堕ちる前夜、凶暴化した職員……ただご主人様と慕っていた時のコト。

お部屋にて4時間にも渡り子作りセックスをさせられた……衝撃的な初夜を思い出させる。

……今日に見えているゾンビは複数人。

ふと頭によぎるのは……

——この人数に翻られてしまったら、どれだけ気持ちいいのでしょうか？

浅ましい、淫らな欲求……でした。

……同時に、身体も酷く発情してしまつて……っ♥

ちらと見えるのは熱り立つたペニス、大きく開いた口、力強そうな腕……

鼻孔に飛び込むのはむわつと香る男の香りで……耐え難い、抱かれないという欲求を生み出して……っ♥

「……もう、ご理解頂けないでしょう……これは、慈悲つ……ですっ♥♥」

私は、快楽に負けたわけではございません……ただ、哀れにもゾンビになつた職員の皆様への最期の慈悲を与えるだけです♥

じりじりと迫る雄臭漂わせるゾンビに……その一部欠損が見られる腕に……ぎゅつと、抱かれました。

すこしは頭が残つているのでしょう……ふふ、上手に私の身体を挟んでくださりました。

太ももは持ち上げられ、前後の穴にびつたりと……

ずぶぶうっ……♥

「あはああああああつっ♥♥♥♥♥」

たつぶんっ♥ぶしいいっっ♥♥

もう、おかしくなつて久しい気がします、私の身体はもう準備万端。

ゾンビと化した職員の極太ペニスを前後でしっかりと受け止めきつたのです。

こんな……馬かなにかと思う肉杭……ひどい快楽に絶頂を禁じえません♥♥

重くずっしりと弾む胸からは大量の母乳が溢れ……膣からも愛液が溢れ出ていく。

もう始まってしまいました……こうなっては、しようがないのです♥

どっちゆん♥どちゆつ♥どちゆつ♥ぱんっ♥

「はっ♥はああっ♥♥あんっ♥あっ♥あああああっっ♥♥♥」

前後、交互に挿挿が織りなされる。

膣に直腸に……太く脈打ち私を浅ましいメスに墮とそうとする肉杭が交互に、奥深く

まで♥

……ああ、理解っています……もう、身体が墮ちきつている事なぞ♥

心も、傾きかかっているのも……理解っています……っ♥

この醜い死体に犯されているのに悦び、喘いでしまっている……それが、何よりの証

拠でしょう。

……ああ、もつと……ぐりぐり、されて……♥膣内に、精液……いっぱい♥

どぶっ♥どびゆるるるっっ♥びゆくっ♥♥

「あああああああああっっ♥♥もつと、御慈悲をっ♥♥お情けを……くっださいっ♥

♥」

私の胸からは母乳がさらに溢れ……噴水のごとくゾンビの身体を伝い落ち……

待ちきれないゾンビが左右それぞれ乳房に吸い付いてくる。

膣にも直腸にも……ゾンビの精液が再びパンパンになるまで注がれて……
理性というものが溶けて、消えていく——

私は……いやらしい、スケベメイド……です♥

メイドは自覚し深みに潜る

肉欲に溺れてしまった私はゾンビの皆様に変わる代わる輪姦され続け……メイドとしての誇りも何もかも……汚されきっていました。

いえ、放棄してしまった……と言ったほうが正しいのかもしれない。

身体は私の心情に強く影響されてしまったのか……快楽をより強く感じオスを受け入れる為に解れてきた様に思います。

乳房も爆乳と呼んで良い淫らな大きさになって尚大きく膨れ……もう私の身体のバランスを著しく損ねている始末。

ヒップも……大きくなっているのでしょうか、揉み回される手の食い込み方がより深くなっていたと……思います。

「あっ♥あっ♥あふっ……あんっ♥」

そして、今も尚……私はゾンビに犯され続けているのです。

もう……快楽に浸りすぎて……抗うのもバカバカしく思うのです……

そもそもですが私はメイドとしてご奉仕する内容の内……男性からのセクハラの内容もありません。

もともと快楽に弱めなもの……あつたのかもしれないね。

ならばこうして……極太ゾンビペニスを膣と尻に啜えこんで乳房も揉み吸われ……乱暴に輪姦されるのも当然なのかもしれません。

私は……特定個人のメイドではなくありとあらゆるオスにご奉仕すべき淫らなメイドなのかも……？

そう考えるとスツキリします、今の私の境遇も……向けられる性欲も……

そうあるべき物として捉えられるのですから……♥

呻きながら腰を振り抜くゾンビも理性を失いながらも私を魅力的なメイドと認識されているご様子……♥

ならば……明確な主を失った今は……このゾンビや化け物と罵っていた相手に性的ご奉仕をするのも……

どぴゆるるううっ ♥♥♥

「はああああああつっ ♥♥♥ ああっ ♥お腹、いっぱい……♥ つっ ♥♥」

存外悪い選択では……無いのかも、しれません ♥

私はご奉仕欲と性欲を満たせ……あちら側は性欲を満たせるのですから。

泣き喚くことに流していた筈の涙は……いつしか情欲による反射的な物へと変わってしまいました。

逃げるためになけなしの力を入れ抵抗する素振りを見せていた四肢は今のご奉仕するゾンビにしつかりと……組み付いて……

お腹いっぱい注がれる精液の熱い迸りに対して……深い深い官能を味わい、浸る。

抵抗するもの……ええ、やはり馬鹿らしいです……♡

「もつと、もつと致しましょう……ご主人様……♡」

どくんっ♡どくんっ♡

身体の奥底から私が組み変わっていく。

熱い疼きと共に……馴染み、溶けて……混ざり合い……

改めまして……ご主人様達にご奉仕を続け……あわよくば別なご主人様をお探し

しましょう。

情欲の熱に浮かされた私は……本心からそう思い、ゾンビと交わっていました。

ゾンビが精力尽き果て、倒れ伏し……屍の数が6になろうとした頃、私は正気に戻り

ました。

熱が冷め……バカになっていた頭が冷えたと言えましょう。

……淫欲にもう負けてしまっているのは認めます。

しかしこのゾンビたちを一度でもご主人様と……もしかやBOWとやらの能力だった

りするのでしょうか？

つぶつ……とくんつ……とくんつ……

「ツ……なん、ですか……今の感覚は……」

か、軽く絶頂を味わうような快感と多幸福感が脳に……いったい、これは……？

あのセックス中の理性の溶け方といい……私もゾンビ化の兆候があるのでしようか？

凄まじく不安ですが……そうなったのでしたらこの館と共に屍となるだけ、ですね。

生ける屍となるくらいでしたら自決……と言いたいですが、この精神の基礎はしがな
い小市民。

どうしようもなく生にしがみつきたくなるのです。

まだまだ、私は真に仕えるべきご主人様にお会いしていません。

「……ゾンビ達も永遠と使い潰すつもりだったのでしょうか……未だに勃起しているの
を見るとゾツとしますよ」

身体にこびりつく濃ゆい精液を払い落としつつ立ち上がる。

否応なしに目につく回りのゾンビ達の山を見て嘆息が出来ますね……

警備員、研究者……服装に差異はあれど全員そろって下半身はむき出し、ガリガリに
やせ細って尚生殖器はまだピンピン。

……少々ムラつと来てしまうのを禁じ得なく、エッチには大層弱くなつてしまつたと自覚させられます。

ちようどいい肉バイブだと思つてしまつたではないですか……

「……カードキーですか、渡りに船ですね」

研究者と思わしきゾンビの懐にキラリと光るものを見た。

失礼して拝借すると……アンブレラ社のエンブレムが施されたカードキー。

他にも日記帳等も……道中読むとして……

「どうか……安らかにお眠りくださいませ」

私個人としてはアンブレラ社に不信感を否認ませんが……

こうして屍となつた皆様に祈りを捧げることくらいはしてもよろしいと思えます。

もしかしたら……この人達も私と同じで詳しくしらないままなのかもしれません。

一番の障害となりえるゾンビ達がこうして干からびてくれたのは良いことです。

この寄宿舎の方も見て回り……ふむ……？やはりここで少々怪しげな実験をしていたご様子。

手記には地下水槽の入り口に関するメモとそのロック解除の為のカードキー……パスワードまで。

セキュリティ意識がお粗末ですが……今回に関しては助かりましたね。

「本棚の裏に地下への入り口……ますますもってからくり忍者屋敷ですね」

記されている内容は断片的でその本棚を探さなければならなさそうですが……

心当たりが無くはないのです、お掃除に入ることも禁止された部屋……

他の本棚は一度お掃除をしていて異変などに気付く事ありませんでしたので。

いくらか絞れるだけマシですね……そういえば……こちらにも替えのメイド服をご

用意していただいていたような？

直接現物を見たことはありませんでしたが……こちらでお楽しみを下場合に備えて、

だったのでしょうか？

……手記のほうも私の事がちらほらと書かれていましたので。

外は相変わらずの夜闇、カラスの不吉な鳴き声がよく聞こえてくる。

以前見かけた蔦は……そういえばどこから？

照明はあまり必要ないレベルですが……暗い足元から襲われたら流石に……

一度使用人室に立ち寄り衣服なども一度整えましょうか。

「たしかコチラで……最悪、ですね……」

建付けが少々軋むドアを開ける、私も数度使わせて頂いた部屋には……一人の死体。

それも首吊り自害、遺書と思わしき物と……傍らには私が普段使っていたデザインの

メイド服。

ただ乱されていてスカート部分にはシミが……鼻につく独特の匂いからしても自慰のオカズに使われた事が伺える。

他にも私のサイズに合わせていたブラ、ショーツも同じく……頭が痛くなる物ですね。

この引き裂かれたメイド服よりはマシですので使わせていただきますが……

「香水はまだありましたね、これで少し誤魔化しましょう」

正直な所を言えばさらに身ぎれいにしていききたい所ですが……時間的猶予というものあまりないでしょう。

手記や保安部長へ宛てたFAX等から証拠隠滅に何がされるかわかったものではないかもしれません。

呑気に水浴びをしていたが為に処分され、闇に葬られる等……笑い話にもなりませんね。

両手の手袋は無くあくまでメイド服の大事なスカート等が復活したのですが……これはこれで良いですね。

気が再び引き締まる物です……私はベルファスト、誇りあるメイド。

……今は淫らな身体と淫欲に負けているメイドですが……いずれは同じ様になって

いたと思います。

やはり胸元の布は足りず乳房は丸出しですが……これはコレで良いです。

どうせ引き裂かれるのですから……ならば最初から出しているくらいが良いのでしよう。

「……人の気配？」

着替えを済ませ、拾い集めた物品を移し行動を再開すると……どこからか人の明確な声が聞こえた。

ゾンビのようなヨロヨロとした足音ではない……まだ、だれか残っているのでしょうか？

気配を殺しそろりそろりと廊下を進む……

「……あの扉、でしょうか？」

それらしき開閉音はして……一瞬見えたのは閉じられる扉。

きつとあの向こうに居るのでしようけど……理性を保っているのか、それとも……
パンツ……どきっ……

「……自決、ですか」

またも一人この現状に嘆いたのか絶望したのか……消えてしまいましたね。

恐る恐る開いてみれば……ほのかに香る硝煙の臭い、そして……頭から血を流して倒

れる男性。

研究レポートを抱えているのでしょうか？

いえ、これはインシデントレポート……水棲生物の実験槽で大暴走が発生。

ネプチューンは制御から外れた……他の実験生物も制御不能に陥り複数人の研究者が犠牲になった……ですか。

そしてこちらは遺書……

「これらがあるという事は……今その実験槽に降りる本棚は動かされているということですね……」

他にまだまだ部屋はございます、それらを見て回ればその中で見つかる可能性は高くなつたと思われ……

……何か大いに暴れていらつしやるご様子。

ズルズルと大きな物が引きずつているような……あの蔦でしょうか？

あまり長居しては襲われるかもしれませぬ。

もつと別な化け物って可能性もありますが……そうだった場合は私はどうしたら良いものでしょうか。

今まで例外なく性欲をぶつけられ続けていて……あの蔦でさえそうだとしたら……

どくんっ
♥

「っ……はあっ♥」

身体が疼く……強く、強く。

ポタポタと滴り落ちるのは汗ではなく……愛液と母乳の雫。

想像してしまうのは耐え難い快楽の嵐、女としての幸福感のラッシュ。

振り払いきれないまま探索を続ける……程なくして件の本棚を発見したのですが

私の胸に抱いている感情は期待感と恐怖の2つ……期待感の方が強かったのは……

もう、私が手遅れな証でしょうか。

海の香、母なる香りに包まれ……

深く立ち入ることは無いだろうと思っていた部屋……その奥には動かされたままの本棚が。

そしてその本棚の向こうには木造の宿舎とは異質なコンクリート。

あからさまと言えばあからさまで……ドキドキと心臓が鳴りますが……

その高鳴りの原因は淫欲への期待なのか……それともまた私がグズグズに溶けて一介の雌に墮ちることへの恐怖なのか。

正直な所私にはもう判別することが出来かねます、両方なのでしょうか？

とろお……びゅくっ♥

「身体は……期待していませんね、嘆かわしい事です」

在りし日であればお仕置きに乳揉みをされていたことでしょう。

お掃除中に少しムラつとさせただけでお仕置きに胸揉みを賜ってしまいましたので。

……お気楽に身体を差し出し双方悦に浸る事が出来るまどろみのような毎日に戻りたくありますね。

こんなにも甘い香りをさせていたら化け物は吸い寄せられることでしょう。

逃げ切れるとはもう思えませんが、この後何度抱かれ正気を失いかける事なのでしょう？

憂鬱になりながら……コンクリートの上に立つ。

実に重そうな鉄の蓋と長く続きそうなハシゴがあり……奥からは水音が聞こえてくる。

嫌な予感しかしません、研究資料等揺るぎない証拠を入手出来るのか不安視されますが……

この地獄の穴に潜る他なさそうです、他にも研究施設はあるかもしれませんが……他の場所は存じ上げませんので、こちらを行く他……ありませんね。

もう、胸元は隠しきれいていませんし……今のメイド服もいずれは破かれる事でしょう。

胸元を隠す筈だった布を引き裂きより合わせ……辛うじてハシゴを上り下りする間邪魔にならないようにする……

まあとても簡素なビキニを作りました着用、当然揺れの抑制など出来ません。

かつん……かつん……ゆさつ♥たぶん♥

一歩一歩、下へと降るたびに揺れる胸、かすかに感じる快楽。

徐々に上がっていく身体のボルテージ……一挙一動で勝手に発情してしまうのは、だ

めですわね……

快樂で手や脚を滑らせて落ちてしまわないように気をつけないと……

「っ……………はぁ♥」

胸の先端はもう固くなり、いつでも虐げられる準備は整いきっている。

自覚すると余計に乳首の疼き……母乳がトロトロと出ることへの快感を意識してしまおうのです。

本当に……淫らな女になってしまいましたね、私は……

自分の身体の様子に嫌悪しながら、深みへと潜っていく。

大凡ですが、ビル3階分は降りたと思います。

降りきり地面に足をつける、そこは鉄の床……音が反響するコンクリート剥き出しの空間……

警告や注意が掲げられた看板もありますが、結局は許可なく立ち入った場合命の保証はしない……

そういう類の警告です、理由は特に書かれていませんが後ろめたい事をしているのは間違いなんでしょう。

どくんっ♥どくんっ♥

「ツツ♥♥この、疼き……ツツ♥」

間違いなく化け物は多いでしょう。

私の身体が疼いて疼いて知らせるのです、ご奉仕するべき雄が多くいると……

元々私を怯ませるだけ強いモノでしたが……今は……私を一瞬脱力させ隙だらけにするモノに。

乳房からも母乳が噴き出して私の居場所を知らせることでしよう。

たたらを踏みハシゴに身を預け息を整える……相変わらず、どちらにと言うのは分からない物ですね。

ただ、この感覚で知れる化け物は私を殺すことは無いのでしよう……ええ、死と同等の凌辱は受けますが……

「……水漏れが起きていますね」

奥を見れば……通路の途中で水が漏れ出しているご様子。

浸水……というほどではございませんが、足元が伺えませぬね。

左右の側溝の底も見えませぬし……気をつけないといけませんね。

カツカツと音を立てながら奥へと……水棲生物の実験槽……

水場の生き物にあまり良い思い出は……ございませぬね。

この施設はあまり大きくはなく……海洋生物と河川に生息するもの……

海水域と淡水域の生物で大分類がされ……その中でも大きなモノと小さなモノで分けられているご様子。

首尾よく職員の研究室の一つにたどり着けたのは良いのですが……証拠資料としては些か弱いモノですね。

実際に実験していた資料各種……最低でも一体……詳細がわからなければ。

投与していたというウィルスのサンプルがあれば一番ですが……そんな劇物私は持ちたくはありませんね。

……私がもう既に感染し保有している可能性もありますが。

「T……これが、私をこんな地獄に落とした元凶ですか……」

人類に進化を齎すと記されていますが……あのゾンビの姿が進化と言うなら……

「クソ喰らえです……!」

ダンツ……憤りに身を任せ机を叩く。

実験道具だったりするのでしよう機器が揺れ音をたてますが……もう、聞く者も咎める者も居ません。

大型生物の実験槽に向かうのは愚の骨頂でしょう。

小型の方へ……それでも、イヤな予感をさせるのはこれまでの経験から……でしょう

か？

「嚴重ですね、バイオハザードを恐れて……というよりも純粹に漏洩を恐れてでしょうか。」

件の実験槽にはエアロック室を通ってからでなくては入れない様子……

「……これで水漏れなどで部屋が浸水しきってしまいましたら終わりですね」

懸念事項はたくさんありますが……虎穴に入らずんば虎子を得ず、です。腹をくくりましょう。

防水扉は重く、女性の身である私には苦勞を強いましたが……特に問題は無く小型生物の実験槽というのに到着。

中は……大規模浸水というほどではございませんが水漏れは起きている様子。

軽い床上浸水……というのも相応しいか不明ですね。通路のすぐ脇は水浸し……下にはいくつか水槽がうつすら見えます。

各実験生物に細分化……されてるわけでもございませんね。

ずらりとならんだ水槽に浮かぶ様々な生物……特に目を引くのは異様に触手が多くなつたタコ、でしょうか？

いや、それよりも凄まじいモノがありました……！

「なん、ですか……これは……」

タコよりも酷いものが浮かんでいたのです。

巨大で全長は2メートル程でしょうか？人間のような四肢があるのですが……

なんと言いましょう、悍ましい……人のようなタコ？タコのような人？

……一瞬フラッシュバックしたのは人に……マーカス様に擬態していたヒルの集合体。

どうかこれらが起き出すことがないように……両手を合わせ神に祈りながら通り抜けていく。

こんな見るも恐ろしい実験体と思われるモノの数々で形成された回廊を進む。

今にも動き出しそうなのが本当に恐ろしい。

どくんっ ♥

「はっ ♥ ああああっ ♥ ♥ あ、ああ……んっ ♥」

反応は、する……強く、強く……

するり……

何かが私の足元に居る、そう知覚したのは……手遅れになってから、でした。

急激に足元から力が抜け……次に水面から姿を表したのは……

色とりどり、毒々しいまである触手の数々。

推定するならば……その形状からして、イソギンチャク、でしょうか？
先端は丸く長く太く……いくつも……

そして巻き付く先から力が……いえ、これは麻痺でしょうか……？

「……ふふ、この磯の香り……なぜ心地いいのでしょうか？」

ぱしやりと水面に崩れ落ちた私を触手が支え、身体中に這い回る。

つるりとしたその触手が……股座にぐりつと頭をこすりつけ……乳房を弄ぶ。

もう、これはお約束……なのでしょう？

現実逃避のつぶやきは……誰に聞き入られることも無く掻き消える。

ぱちゅんっ ♥ どちゅどちゅどちゅ ♥ ぐちゅっ ♥

「はっ ♥ ああああああつっ ♥ ♥ あんっ ♥ んぶっ ♥ ちゅぶっ、あ ♥ ぶぶぶ……ふあああつ ♥ ♥」

水のカムフラージュに紛れメイドを待ち受けていたのはイソギンチャクの無数の触手。

生殖能力は乏しくその種はあまり多くはない。

何に長けているかと言えば……その生殖能力の低さを補うほどの苗床改造能力であつた。

Tに求められる物は一切持ち合わせず……本来であれば失敗作、廃棄処分であった。副次的に生み出されたプラントによりより高濃度の物を……と処分待ちだったモノが解凍されていたのだ。

つまり……いまメイドが居る場所はそうだった”失敗作”の水槽なのだ。

そして奇しくも苗床として仕上げる触手に真つ先に捕まった……

豊満が過ぎる乳房にはいくつもの触手が我先にと絡み搾りその先端を弄くり倒す。

左右独立して絞り上げられ揉みほぐされていくなか……谷間にも数本の触手が潜り……

メイドの喘ぎ声を上げる唇に潜り込み特濃の液体を注ぎ込む。

膣も大腸も……その奥さえも……余す所なく、触手が入り込み改造していく。

苗床適正の高さを示すようにメイドの膣には合計4本もの触手が入り込み暴れまわり……尻にも3本も入り込む。

常人であればショック死が待つであろう事にも……平然と喘ぎよがり狂う。

その姿はもう完成された苗床、それでいて尚改造の余地がある……

丸く適度に柔らかく……見るもの魅了して止まない乳房はもう一抱えするほどに大きくなっていったが……

さらに更に大きく、その乳房でもって生命を育める程に……巨大になっていく。

もうメイドのヘソを隠してしまいそうな程実つてしまふ……

「ん”ん”ん”ん” ツツツ ♡♡♡♡」

絶頂に絶頂を重ね……水槽には母乳が注ぎ込まれ……栄養不足気味で休眠状態だったBOWモドキが次々に目を覚ます。

それぞれ……至極の女体、苗床に己の種を産み付けるべく……

どぶどぶっ ♡

「—— ツツ ♡♡」

メイドはオスに求められ精を吐き出されればコレ以上無い幸せに喘ぎ鳴く。触手に絡み取られた両腕も両足もピンと張り詰め……がつくりと脱力する。

……下品ではないが、女の……雌の悦びに蕩けだらしな顔を晒し触手達をそれぞれ
の口で締め付けご奉仕していく。

苗床メイドの恍惚

イソギンチャクによる改造・調整はよどみなく進み……

ベルファストという一介のメスを完璧な苗床女として完成させた。

BOWのゆりかごととなった女に……雄は殺到していく。

そう長くない命を次に繋げるために、より強い暴力を産むためだけに……

役割を果たしたイソギンチャクの触手は力なくはらりと水面に消えていった。

己の卵を産み付けるまでには至らず……その前に力尽きたのだ。

「…………お♥…………つ♥あ♥」

ビクンビクンと快楽の余韻に震えるベルファストに次なる番が迫る。

快楽に染まり、虚ろな目で居るベルファストは認識しきれていない。

むしろ離れていったイソギンチャクの触手にまだ犯されていると錯覚しているまである。

より大きく、子を育む為だけに特化したいやらしい乳からは母乳がリズムカルに吹き出ているのも……その証。

人工の光が薄く照らす巨大プールに浮かぶ影。

それもまた何かに尖りすぎた者達ばかり……本来必要とされる凶暴性、制御可能な知性……そして生産性。

どれかが欠如……ないすべてが欠如したような者ばかりだ。

等しく持ち合わせているのは原始的な……性欲ばかり。

では完成した苗床、ベルファストを使うのは誰だ？

その一番手に名乗りを上げたのは……Tを投与され凶暴さを増したは良いが制御が
できなくなつた……そういうタコだ。

変異も少なく開発としては失敗作、せいぜい少し巨大化した程度だ。

それでも人間を襲えば脅威になりうるサイズ……触手も力強くアンブレラの警備員
も対抗出来ないほど。

そんなタコが……ベルファストの玉体に触手を絡めていった……

もう、どれほど……私が犯されたのか、正直把握しきれいていません。

この水槽に足を踏み入れてから何時間？何日経つたのかさえも……分かっていませ
ん。

90台に収まっていた乳房はもう見る影もなく膨らみ……お腹には何の精液かわか

らないモノが多く叩き込まれ……

両乳房も何か……卵を産み付けられているご様子で。

意識が幾分戻ってきた今も……触手が私を犯しているのです。

「ああああああっっ♥♥」

堪え難い程とはもう思えないのですが……もう、耐えるのも辛いのです。

いえ、ここまで犯され抜いて……耐えるのもバカバカしいというものです。

主人としてこの化け物を受け入れる訳ではございません……

メイドの誇りも汚されてしまつては居ますが……それを捨てきつた訳でもございません。

ただ……もう、メイドとして動くのは不可能でしょう、夜伽専門か搾乳奴隷となる外ありません。

であれば……今のこの快樂に浸り慣れ親しんでいれば……これ以上無い修行となりえましよう。

なにより……私がとても楽です。楽なのです。

じゅっつ♥ たぱんっ たぱんっ♥♥ ぶぴゅっ♥

私のかすかなプライドと共に……お腹で命がかき混ぜられていく……

大きな大きな……タコの触手で……

いえ、タコだけではございませぬ、両乳房にはどこから来たのか貝が居るのです……大きな口をあけ……吸い付く様は赤子か……ヒルのよう。

細長くうねる機関もある事から……おそらくはこの貝はイモガイかと。

人間15人を軽く殺せる猛毒を持つ貝……それも実験に使っていたのでしょうか？
乳房に……産み付けているのはこの貝だったりするのでしよう……

「はっ♥ふっ……まだまだ、メイドめを使いたい方々が多いござ様子……ですね……♥」
水面下ではまだまだ数多の影がうごめいているのです……

これは……長い間愉しめそうではありますね。

お腹の中からはまた鼓動が聞こえてきて……私がまた母になったのを……如実に示しているのです。

もう、シヨックを受けることも……ございませぬ。

粛々と……この扱いに慣れてしまった……私の欲望というものが性的な事に塗り替わってしまった。

……その証拠かも、しれませぬ。

「ツ♥はあ……♥産み付けられるのも……クセに、なりそうです……♥」

目的である……この非合法的な研究の証拠というモノを回収も忘れて没頭しかけてしまふほどに……

私はこのBOWという屈強な雄達に……屈してきてはいました……

「ふっ……ふっ……もう、おしまいなのですか？」

産み付けるだけ産み付けたのか……両乳房の貝も、タコの触手も……離れていきました。

他の生物も伺っている様子ですが……襲ってくる気配がございません。

残念……と真っ先に思うようになった辺りが……私のメスとしての調教具合を物語ってしまいますね。

とくん……とくん……♥

身重になった証を……そつと撫で微笑む、もうそこに忌避感や嫌悪感はございません。

……証拠が受け入れられなかった場合は私の子宮を調べてもらったほうが良いかも知れませんね。

おそらく……一般的な人類のモノとはかけ離れた事には……なっていることでしょう。

実験データを採っていたでしょう実験室に到着しましたが……これまた酷い有様。

そして……それらしい物は……残念ながら消却されてしまった。

さもありません、いかにコンプライアンス意識が低くとも漏洩したら一発アウトな物は流石に消去しているご様子……

帰り道の最中も襲われることをどこか期待していたのですが……お腹に抱えたままでは襲つてこないのでしょうか？

そんな殊勝さを持つているとは……思い難いのですが……

しかし……このお腹と胸を抱えたまままでハシゴを登れるとは思えません……

一体どうしたものでしょうか……

幾分……快樂に慣れてきているのか、それとも過敏な神経が落ち着いてきたのでしょうか……？

快樂の感じ方も落ち着いてきてはいるのですが……先端を掠ればいつてハシゴから手を離すのは目に見えて……

「そういえば……この実験槽から運び出す際は何を……リフトか別途何か出入り口がありそうですね」

この水棲生物実験棟を探し回れば……見つかるかも知れませんね。

それにです……探し回れば……

「またゾンビの皆様とお会いできるかも……しれませんね♥」

もう私の目的が……脱出よりもその道すがらに出会うでしょう雄との性行為に……シフトしていました。

それでも良い……苦しみぬくよりも……幾分マシと言えるものです……前向きになったと……私個人的には思っております。

「それとも……この子が生まれてくるのが……先なのでしょうか？」

お腹の強くなつていく胎動に……少々頭が冷えていく。

あの苦しみはもう懲り懲りなのですが……

身体の方は興奮しているのでしょうか？鼓動が高鳴つていくのです。

それとも……陣痛、出産も回数を重ねれば……幾分マシになっていくものなのでしょうか？

世の中には何人もの子供を産む母親が居るんですから……

カツ……カツ……

メイドの歩む足音が響く地下……別な水槽へとつながる通路には淫乱に堕ちたメイドの愛液と母乳の滴りが刻まれ行っていた……

苗床メイドの一区切り

思いの外この水槽施設は大きくはなく……嬉しい反面残念な気がしてなりません。見つけてしまったのです、ええ……外へと繋がる搬入口を。

お腹の子が出てくる気配はまだ無く、本当に残念です……

まあ……こちら、水槽の生物達は研究者達いわく出来損ないだそうで……では完成品と呼ばれる生物は如何ほどなのでしょう？

兵器としての成功となれば……かなりの暴力性があるのでしよう。

ふと脳裏に浮かぶのは私以外の元人間だったゾンビの皆様。

あの皆様方はそれはそれは暴力的でした、メイドめにはレイプ。

他の男性には噛みつき食い殺す……野性的とも言えましたね。

断片的な資料しかございませんが、ウイルスがそうしたと考えるべきでしょう。

私も感染しているのかは不明ですが……この惨状を見る限りでは保有していると考えたほうがよろしいかと。

さて、それはさておき……見つけてしまった搬入口は何処へ繋がっているのやら……どくんっ ♥ どくんっ ♥

「ほっ……ふ♥ふふふ……元氣いっぱいですね♥」

目下愉しみなのは……このお腹の赤子がいつ生まれるか、です。

お腹を撫でてふと気がつく……驚くほど自然と微笑んでいたのです。

心理的に許容したのはしたのですが……こんなにも馴染むと、心中複雑ですね。イク事もなくなつて、快感に浸る余裕というものも出来て……

「電源は残念、生きて……?」

コンソールをカチカチと動かしてみるも反応がない。

そもそもこの搬入口の……リフトでしょうか?その電源が死んでいるご様子。これは修理するにしても……大掛かりなコトになりそうです。

配線がどこか切れているのでしよう……と見た所でした。

ぼたり、露出した肩になにか滴り落ちてきたのです。

ねつとりとした……とても、甘い香りの粘液……嗅げば身体の芯が疼いて……
「っ……コレは……あっ♥そんな、乳房を……あああっっ♥♥」

次に耳にしたのは……何かが蠢く音でした。

シウルシウルと這うその音に耳を傾け、目を向ければ……あつたのはツタです。

ツタ……寄宿舎にて一度見たあの蔦でしょうか?

私を認識したのか動きが一気に機敏に、すつと乳房に絡みついてきて……

ぎゆうっ ♡ むにいいいっ……♡

ぷしっぷしいっ ♡

先端から根本へと……とぐるを巻いて……

更には私の両手両足に絡みついてくるのです……そして……グイグイと引っ張り

……

何処へ連れて行くつもりなのでしょう？

ああ、もう……ゾクゾクとさせられます……♡

今度はこの薦による触手プレイが楽しめるのでしょうか、それは間違いないと思われるます。

奇しくも、登る手段に困り果てていた私には丁度よい……引き上げでした。

しかしながら……見通しが甘くございました。

この触手の主は暴食の化身でした……

むにいつ ♡ むにゆむにゆ ♡ ぢゆううっ ♡

「はっ ♡ はっ ♡ ああっ ♡ 搾られるのがお上手で……はあんっ ♡」

真っ暗な中、浮遊感と触手による搾乳を受け続ける。

不安は多少なりともございますが……それ以上に使われる悦びというものが勝って

しまうのです。

思えば思うほど……私、ベルファストは……こうしてメイドになったのも、苗床みたく使い潰されるのも……

こう、あるべき姿なのかもしれません。少なくとも……私はそう感じてしまうのです。

本来であればメイドとは一人の主の為に尽くすモノですので毛色が少々違いますが……

自らを捧げるという点では……今の私は違いありません。

この大きく大きく実りきってしまった乳房も……全ては……

どくんっ……！

「ほっ、あ………があっ………！」

この、激痛………ま、まさか………今この状態で産気づきますか………！

一番よろしくないタイミング、ですね………流石に地面から何メートルも上にならば

……

う、生まれ墮とす前に地上に引つ張り上げられませんか？

引き上げられる感覚的にはもうそろそろ………地上付近ではあるとおもいますが。

この………鳶は………ああ、やはり寄宿舎にあったモノですね。

寄宿舎の板材が見えてきました、ですがこれは……大部分が侵食されている？
「ふっ……ふっ……くっ……」

陣痛に耐え、歯噛みしながら再び見た寄宿舎の中。

立ち入った覚えはありますが……これは、凄まじい事になってます。

寄宿舎の大広間……なのですが、天井一面にこの蔦の主が根を張っているご様子。

ぶら下がった大きな大きな球根……いえ、これは……胚、でしょうか？

「……あ、お、おやめください……子は、産ませて……」

太く、私の身体に絡みつく触手よりも大きなモノが股座に……

今まさに子供が生まれ出ようとする産道に鎌首をもたげてきたのです。

その雰囲気は、助産ではなく……排除。

いえ、これは……食欲を満たそうとしているご様子！

身を振っては抵抗してみせるのですが……ああ、どうして……メイドめは無視し、子

を襲おうと？

いえ、メイドの母乳では満足しきれないから……でしようか？

「ほ、お……っっっ♥♥」

ずぶっ……にゅぶぶ……

決定権は私にはございません、全て握るのは私を使う側……

当然のようにその太い太い……私の腕程はあろうという太さの触手が潜り込んでいく。

膣を抉られるこの快感に痛みや苦しみは消え去り……私の肥大化していくメスの本能というものが刺激されていくのです。

より強い、より快楽を与えてくださる方に……と身体は興奮し、母乳も愛液も分泌していく一方。

その結果、私が腹で育んでいた生命がなくなる忌避感というのも……薄れていくのでした。

「なん、女あ？」

「ふむ、面白い……脱出するまでの間研究を続けるとしよう」

私の痴態、蕙のご主人様を観察する方がちらと見えましたが……もう、それはどうでも良いのです……

私の全て……今この時は、蕙のこの……ご主人様に捧げましょう♥

——研究者の手記

プラント42の経過観察を続けていた所だった。

アレに捕まれば大体の人間は即死を免れない、観察は非常に神経を使うモノだった。

あの女が捕まり、ミルクサーバーとして稼働するまでは……

何が原因か不明だがあの女はTの影響を受け付けていない様子だ。

地下に閉じ込めたあの化け物とは別だ、見た目が崩れる様子も一切ない。

それでいてTのBOWや偶発的発露のBOW達に敵対される様子も無い。

食い散らかされることもない……この要因を解明できれば今まで落第点として処分

してきたBOWが再利用できるかもしれない。

だが……問題はプラント42がその女を手放さない。

まるで守るかのように女を核付近に抱え込み、鳶を巧みに蠢かせて女から母乳を吸い

上げている。

ただ母乳だけでは足りないのか獲物を探すのは止めない……獲物を見つけたら扉に

鳶を絡め施錠する。

その特性は変わらないようだ。

ミルクサーバーとなってる女の名はベルファスト、英国より渡米してきたメイド。

トレヴァアの女の後釜としてメイドを勤めていた女だ。

警備員の連中が事あるごとに抱きたいと言っていた女……少々ふざけたデザインのメイド服を着ていたのは覚えている。

遠距離から何かしら採取する方法があれば……とも思うが、残念ながらその手段は無い。

惜しい存在ではあるが……この館の廃棄処分が確定した以上共に爆破されるだろう。なんとか引きずり出せたらラクーンの研究所にスグに輸送するのだがなあ……

女が居ない！それに腹を立てたのかプラント42が暴れ
なんだこのヒルの大群 ■■■

——血に塗れた走り書きより抜粋

バイオハザード0付近 養成所へようこそ

……只管黻られ続けていたハズ……なのですが。

ついに私は死んでしまったのでしょうか……？死因が絶頂のしすぎとは笑えませんね。

……いえ、まだ生きているのでしょうか？身体のうちから鈍痛というものが襲ってくるのです。

もう開けたくないな……とも思いますが、重い瞼を開けてみれば……見知らぬ天井がお目見えとなりました。

今までが夢か何かだったと思いたいのですが残念ながら少し下を見下ろせばズタボ口になった我が誇りのメイド服。

そしてあり得ないほどに膨れ上がった乳房……結局産み落とした子はあの御主人様に食われてしまった……ということですね。

決定権はメイドめに無いとしても……少々、思うところがございます。

「……………これはっ！」

肌に妙なヌメリ……あのヒルが思い起こされます。

薄暗い中で触手により何度もイカされ続けた余韻がまだ身体に残っていますが……沈静化していると見ていいでしょうか？

ですが……感度は高く少し撫でるだけでも鋭く強い快楽が走るのは避けられませんね。

さて、ここはどこでしょう……？あの地獄の館では無いご様子。

「……アンブレラの紋……関係施設のどこかしら、でしょうか？」

電気は一応通っているご様子。

……？館内放送、でしょうか？

『静粛に、所長のマークスである』

「……」

……やはり、地獄に堕ちているのかもしれませんがね。

最初に忠誠を誓いし御主人様のお声を放送でとはいえ、耳にできるとは。

忠誠は服従、服従は規律を……規律は力となり、その力が全ての源……ですか。

「出来ることならば……私は直接にそのお言葉、お聞きしとうございました」

主なきメイド生活にはもう慣れきってしまいました……

この身が真に欲するのは……やはり、仕えるべき主に他なりません。

今はそれにこの……いやらしい身体を存分に抱いていただけ……

若しくはこの乳房を使用していただける……色欲が強い御主人様という物が加わってしまっていますが……

胸の高鳴りは収まらず、まだ付近に私をお求めな雄の皆様が居るのでしよう。

ゾンビでしょうか？ヒルでしょうか……それともあの葛触手でしょうか？

それとも……別な物でしょうか？

間取りを把握する為にゆつたりと……目覚めた部屋から廊下……大広間へと歩く。

その外観は私が務めていた洋館と同じ意匠が多く……一つ思い当たる物がありました。

今は使われていないというアンブレラ幹部候補養成所、図面だけで知っているそちらとマッチするのです。

エントランスホールに大きく掲げられたマークス様の肖像画。

その表面を……その頬を撫でて……ふと息を吐く。

「マークス様、私は……っ、何……でしよう？」

耳につくのはオペラのような……歌声。

外は暗く未だ夜の帳が降りたまま……それに雨風も酷い。

感覚が告げますはあの化け物達が多く居る事……歌なぞ歌えばあつという間に襲われるでしょう。

ですが、その様子も無い……一体何が……？

もしや私と同じで襲われても犯される方向の女性だったりするのでしょうか？

歌声に誘われるように向かえば……バルコニーに出る。

風雨は中々強く方向を特定するのは苦労しそう……外に出た段階で歌が終わってしまつたご様子。

どくんっ ♡

「……ふう……次は何方でしょう？メイドめは逃げも隠れもしません。ご奉仕させていただきますますとも」

もう誇り高いメイドでは居られません、マーカス様以外も御主人様と認め身体を許す淫乱メイドですもの。

……今もこの鼓動が身体を熱くさせ、早く早く抱かれないと叫ぶのです。

「……これは、また……♡」

頭上を見上げれば……キィキィと鳴く……蟲でした。

類似するもので浮かぶのはハサミムシでしょうか？

とても巨大で……興奮されたご様子で私を見下ろし……その大きな腹からは生殖器

が覗く。

私をメスとして認識されているご様子……♥

目が合えば飛び降りてきてジリジリと距離を詰め……前足を大きく振りかざす。鎌みたいで逆らえばどうなるかと威嚇している様子で……

「ご安心ください、蟲の御主人様……メイドめは交尾の用意は出来ております……♥」
BOWなのは分かり切っています……身を捧げるのが間違っている。

そんなことは理解っています、それでも……そんな道理などどうでもいい程に尽くす悦びというのが私を突き動かすのです。

破かれ、扇情する他にない淫靡のメイド服がもうそれを物語るのです。

雨に打たれる中、腰を下ろし……股を開いて両手でもって……欲しがりな孕み穴を拡げて見せる。

……ふふ、御主人様もお理解りになられたご様子、メイドめは都合の良い女であると……

「あっ♥♥」

覆い被さられ……用意はもう出来た。

乳の谷間に頭を埋もられ……腹を大いに曲げ、メイドの孕み穴に狙いを定められて

……♥

ずちゅっ……ずどんっ ♥♥

たっぷん♥ぷしいっ ♥

「ああああっ ♥♥ごしゅじん、さまああっ ♥♥」

膣を割り抉り、進み……突き上げてくる人ならざる剛直。

容易く私の奥底を突き叩き上げ、全身を揺らし……私をメイドから一介のメスへと墮とす。

乳房は大いに揺れ、勢いよく母乳が吹き出て……バルコニーに溢れていく。

もうメイドを名乗るのも……烏滸がましいかも、しれませんね……♥

本来であれば組み敷かれればその先に待つのは脊椎をへし折られ、腹を食い破られ絶命するという壮絶な物。

しかしそのメイドだけは……例外的だった。

プレイグクローラーと名付けられた失敗作はメイドを押し倒してから真っ先に繁殖の為だけの産卵を始めた。

産卵管を深々とメイドの膣に叩き込み……細い腹にそのシルエツトを浮かばせ、何度も何度も挿挿していく。

グポ……グポ……と愛液とクローラーの分泌液が混ざる音を奏で……

「あんっ♥あっ♥はあああああっっ♥♥ごしゅじ……んひいつ♥ん、あああああっっ♥」

バルコニーの床にその豊かな銀髪を広げ、己の頭よりも大きく育った乳房を揺らし……

BOWの活力となる母乳を噴出させながら喘ぐベルファスト……

BOW全てを仕えるべき主君と認めてから性的接触こそ一番のご奉仕と認識を改め……

愛情をもってその性欲を受け止め、より増幅させるように甘い喘ぎを上げていく。

名器と言って良い膣も産卵管に絡みつき、締付け……子宮も開かれて繁殖準備は出来上がっていた。

プレイグクローラーが前足で抱きとめるまでもなく、ベルファスト自身がキツく抱きついて……挿挿一発一発でぎゅつと力が入っては弛緩していた。

後にLウイルスと呼ばれる物に完全適合したベルファストは淫欲の化身と言って良い。

雄の一挙一動に容易く絶頂に到れる最高の……情婦だ。

凛々しい澄まし顔はもう見られない、トロトロに蕩けたメスの顔で……喘ぎ狂う。

「あっ♥♥あっ♥♥おくっ、そんなにいっ♥♥」

知能は低く、本能に従い動くプレイグクローラーは何度も何度もベルファストという極上の女体の奥を小突く。

強く、何度も……そうすることで人間のメスであるベルがより深くイク事を知っているかのような動きだ。

「勿論それは偶然、ただただ反応を見てそこが弱点だと当たりをつけただけだ。」

何度も何度もイかせて……性感を昂らせれば昂らせるだけ体内のLが活性化していき……より強い子孫を宿させれる。

生物の本能が強そうさせているだけ……

「ふ、ふくらんでっ ♥♥お、おなさけをおっ ♥♥あああっ ♥♥うれしゅうごじや……あああああああっ ♥♥♥」

言葉にならないほどに感じ、悦ぶベルファスト。

ビクビクと何度も震え、身体を跳ねさせながらキツクプレイグクローラーに抱きつく。

ぎゅつと脚も組み付き……受精体制は完全に整った。

産卵管を通っていくクローラーの卵と……特濃でベルファストを一発で妊娠させる精液が込み上がっていく。

その感覚だけでベルファストは深く深く絶頂の向こうへ……

ぶちゅぶちゅ……つぶつ、どぶうつ♡♡

「——ツツ♡♡ほ、あ♡♡~~~~~ツツ♡♡」

胎内に爆ぜる熱い精液、その刹那ベルファストは……断末魔のような嬌声をあげ、果てた。

養成所の全てのBOWを招く……甘い誘引の声を……あげてしまった。

終わりは近くに

何度、何度私は精をこの身に受けた事でしょう。

腹はもう何度目かのぽっこりと膨らんだ……メイドには縁遠い筈だったお腹の丸みを湛えています。

主の子を身籠る榮譽を賜る……メイドとして夢にまでみた光景……

もつとも……今は淫靡なりし身のメイド……産み、育むまでして一人前でしよう。

何方か……私の預かり知らない誰かが居るのでしようか？

それともご主人様同士で争われているのでしょうか？

……真に仕える相手はただ一人ですが……顔向け出来るのでしょうか？

世の男は皆、性に貪欲ではあると思いますが……私は……

「……一度、屋内に戻りましょう、ご子息をむぎむぎ死なせる訳にはいきません」

暗い考えは頭を振って一度忘れ……今はお腹にたつぷりと抱えた無数の命に考えを向けましょう。

何度も……何度も……太く逞しいペニスで私の膺を剝り、子宮に熱い精液と卵を植え付けられた蟲のご主人様の事を……

お腹を見る度に、お腹で何か動く度……リフレインしてしまいます。

——キイツ、キイツ

『あ、ああつつ♡♡♡こしゅじ♡♡ふぎゆうつ♡♡ああんつ♡♡あつ♡♡ほつ♡♡んぎゆうつ♡♡』

あの、無慈悲で強く何度も打ち付ける強い腰の……いえ、腹の振りと言うべきでしょうか？

思い返せばこうも身籠った身体でも熱く、浅ましい……ご主人様との交わりを求めてしまう欲が再燃してしまいます。

乳房は吸ってほしく、搾ってもらいたく……疼いて疼いて……

今すぐにも生まれ落ちてきてくれないかと願ってしまう程に、身体の欲は……燃え上がっていました。

どくんっ……どくんっ……

この身体の内から響く鼓動は落ち着いているといえは落ち着いている。あまり付近にご主人様達がいらっしやらないご様子。

疼いているこの身体を鎮めるには……私から赴いてご奉仕する他に……

「ツ♡……蠢いて……！」

お産の気配……ですね。

お腹の中で激しく蠢く気配、耳を澄ませば微かに聞こえてくるような気がする……甲高い、産声。

廊下を少し汚してしまいましたが……後程……お掃除しますので……♥♥

急ぎ身体を落ち着け、お産の体勢へ。

もう何度もした結果でしょう……お腹への力の入れ方というのも、覚えてしまっていました。

力めば子宮の中からご息が……1つ、2つ……膣へとお出でになられて……

ああっ……折りたたまれた足が、硬質な頭が……私の膣を刺激されてっ……いけません、お産中にこのようなっ……♥

ミリツ……ミチイッ……

「ふっ……ふっ、ふっ……うううっ♥あああっ♥ああああああっ♥♥♥」

……ああ、申し訳……ありません、ご主人様。

浅ましいメイドめは、お産の最中に絶頂するなどという……失態を……っ♥♥

ああっ♥ま、まだ来てしまいますっ……♥お一人、お二人目と……続けて、ごりご

りゆと♥♥

養成所の片隅、廊下で一人化け物の苗床となった麗しのメイドはお産を続ける。

一匹、おぞましい化け物の子を産み落とし……その度に上体を仰げ反らせ、愛液と母乳を垂れ流し……

ぶぽんっ
♥♥

「あぐいっ♥♥あつつ♥♥う、ぐいっ♥♥」

大凡、人目に触れてはならない様な酷い顔で……喘ぎ続ける。

全て生まれ落ちるまでにどれほど……イキ潮とイキ乳を漏らし……

その体内で順応が進む淫らに墮とす魔のウイルスが侵攻することか……

きいきい……愛らしい鳴き声をあげる私が産んだ……ご主人様のご子息達。

大きさは私の拳2つ程度でしょうか？

何度絶頂したことでしょうか……いけ、ませんね……出産というご子息達にとって一番危険な時に負担をかけるような女になってしまったとは。

ですが……幸いなことにご子息達は皆無事……元気に私のミルクを飲まれています。

私の乳房にご子息達……孵化して間もない真っ白な身体で……その顎でもって私の

乳首を……♥

どれほど……私は産んだのでしよう？

頭がぼんやりとして、数えられません……♥

ともかく、今は……ご子息達のお腹を満たすことが私の使命ですね。

「はっ……どうぞ……心行く迄……あっ♥♥」

カリツと嘯みつかれる乳首より……迸る快樂、甘く絶頂に至りながら搾乳される悦び

……♥

乳房の上をご子息に占領されるのもこれ榮譽と言えるでしょう……♥

ミルクは幸いな事に不足なく……むしろ過剰気味なまでに出て……

吸いきれないお坊っちゃんやまはメイドめの太腿などについたミルクを舐めて接種され

ています。

要改善点ですね……

「……また、あのオペラ……？館内から……あ、お坊っちゃん……お、お待ち……」

歌が聞こえだしてから……お坊っちゃんやま方が一斉に……統率が取れた動きで私の身

から離れ……何処かへ……

快樂の余韻激しい私は追いかけることもままならず、その場で見送る他ありませんで

した。

……この歌がご主人様達を導いていたりするのでしょうか？

程なくして、私の体調が戻り、少し……フラつきながらも歩けるだけに戻りました。改めて見下ろせば……これは中々にキツイ、私の頭の1・2倍はありそうな……巨大な乳房。

ここまで大きくなればまともに立っていられるわけもありませんね。

歩けばタポタポと淫らに揺れ……内に秘めた母乳が滴り落ちていくのです。

あれだけ……お坊っちゃんに搾っていたのに……まだ、まだ……足りない……もつと犯していただきたい……孕ませていただきたい……

この、いやらしく実った乳房を余すこと無く揉みしだいていただきたい……

ふらり、ふらり……右へ左へ……足取りは覚束なく……揺られながら、養成所を彷徨う。

私は……脱出なぞ、しなくとも……ここでご主人様達に愛され続けるのが良いのかも知れませんか……♥

「どちらに……いらっしやりますか……ご主人様あ♥♥」

ほたり、ほたり……私の歩いた後には愛液と母乳の跡が残っていききました。

徘徊して回るその姿はある意味ゾンビと一緒。

ウィルスに身を食い尽くされた者の末路とも言える。

唯一違うのは己の理性を保っていないながらも……歪んだ奉仕精神がそうさせているだけという点。

麗しい顔と未だ艶やかな銀髪は見るものを魅了し……

その首から下の淫魔と言われても仕方のないような性の権化と言える有様は……化け物を誘惑する。

それはこの屋敷に長く身を潜める主をも……魅了していた。

さまよい歩けど、ご主人様達の姿がありません……

誠に残念ながら何処かへ行かれてしまったのでしょうか？

さまよい続け……今はこの養成所のゴミ処理場……でしょうか？

水気が多く、暗くジメジメとした所に迷い込んでいました。

こういった所には蟲が発生しやすく……不衛生なのですが……

不気味なほどに静まり返っていて奇妙に思えます。

……ここはアンブレラの施設ですので、何か研究している施設もあるかもしれません。

あの保養所……私がご奉仕させていただいた館でもそうでしたので。

……見つけた所で、私にはどうすることも……

どくんっ……どくんっどくんっ ♡

「ツ♡♡ああっ……♡♡」

強く胸に焼き付くような……なん、ですかこの……強く、私を焦れさせるような……

♡♡

こんなに強く感じるのは、始めてです ♡

どんなご主人様がいらして……？

遠くから耳に聞こえてくるのは重く、大きな何かが這いずる音。

音の方向へ顔を向ければ……ぬうっど現れたのは

「まあ……♡あっ♡そん、な……一気に入いいいっつ♡♡♡」

私を悠々と抱えられそうなほどに大きなムカデでした。

その目は私を見据えていて……私の身体を抱きかかえてきました。

……口は器用にも、私の大きな乳房を両方とも啜え込み……毒を有しているでしょう

牙が……ほんの少し、私の肋に触れていました。

私は……このままミルクサーバーとして吸われ続けるのでしょうか……♡♡

それも吝かではございません……♡ご主人様のお心の赴くままに……メイドめをお

使ひ下さいませ……♡♡

ぢゆううううううううつつ♡

「んひゆういつ♡♡めいどめの……おとおおおつつ♡♡♡みりゆ♡♡んぎゆうつつ♡

♡あ” あああああつつ♡♡”

搾乳いただき、ありがとうございます……♡

ああ、こんなにも心行く迄お乳をイジメていただきますと、乳牛の如き乳房をもつた

……淫乱メイドは感激してしまいます♡

この身……全てを捧げて……ベルファストの雌ミルクを……♡♡

「あああああつつ……あがつ♡あ……♡♡”

館をさまよい続け、その間ずっと焦がれていたメイドは……搾乳の悦びに絶頂し、恍惚の笑みを浮かべたまま氣絶した。

……氣絶した後も巨大なムカデ、センチユリオンと命名された偶発BOWは搾乳を続け……

十分に栄養を補給した後……メイドの腹に卵を数個、産卵し……再び寝蔵へと潜つていった。

子の世話は雌がする……そういうものだろう。

後にはビクビクと……乳腺を母乳が駆ける刺激で絶頂する、無限ループに陥った苗床メイドだけが残されていた。

ヒルの王、顕現

私はどうしたのでしょうか……？あの巨大なムカデのご主人様はどちらへ……？

お腹はずっしりと重く……再びご主人様のご子息をこの身に授かる榮譽を賜ったのは分かります。

産み付けられたご主人様の姿は無く、メイドめはこの処理場に取り残されていた……というわけですね。

未だ身体の内に燻る快楽の残り火が行為が終わってそう長くない事を示していますね。

産み落とすのは責務ですが……私はどちらへ向かえばよろしいのでしょうか？

恐らくではありませんが研究施設……もしかしたら奥地にまだ誰かいらつしやるかもしれません……

産み落とすまでは時間的余裕はあると思われますので……この奥にさらに進んでみましょう。

……扉は開いている様子。

ふ、む……こちらは違う様子……もう少し違う場所にあるのでしょうか？

……モーター音、どこかにエレベーターがあるご様子。

それで移動されているのでしょうか？

少し引き返してはこちらに来た時には見なかった部屋を一つづつ見て回る。

かなり、ほの暗いことをされていたのが伺えます。

拷問部屋に監禁室……酷いものがございますね。

もしかしたら……実験をする際に反抗した者や……なにか、侵入者が居たのかもしれないですね。

お屋敷でも時折警備員のご主人様方が口々に忙しい……と漏らしていたのを思い出します。

その忙しい相手がBOWのご主人様ではなく……侵入者、不屈き者を捕縛するとなれば……

ええええ、私もハンドガンの支給がございましたし……

「赤子の発育にも散歩はよろしいでしょうし……ふふ、少しの散歩と参りましょう」
少々愉快なお散歩と参りましょう。

身重ですからご主人様との愛し合いは少々お控え願えると嬉しゅうございますが……

そこはご主人様の御心のままに……求められれば……この身は差し出しましょう。

「ご息を流すとなればご主人様が怒り狂われるかとも思いますが……私……どうしたらよいのでしょうか……？」

「……マークス様は……今の私を見たらどう罵られる事でしょうか？」

最初こそ、私はマークス様のメイドとして居たはずなのですけど……ね。

今のこの様子を見れば……何かの実験体と見て監禁されるでしょうか？

判りかねますね……私はマークス様の事をあまり知らないのです。

偉大なる研究の始祖を担ったと記述はあるのですが……他は知らないのです。

そう……あまり、その人本人の事を知らないのです……

うじゆる……じゆる……

遠くで聞こえる水音、視線を向ければ……写真で見ましたマークス様のお姿、ですが分かっておりませぬ。

この音と共にとなれば蛭の擬態したお姿でしょう。

……弱い私を戒めるおつもりでしょうか？

「なんであれ……マークス様のお姿となるならば何か関係がございませう……」
……ただ、なんででしょう？ お屋敷で見た時よりもその動きは機敏。

関節などの動きも実に人間のよう……ぐにやぐにやとはしていません。何故……マーカス様の御姿を真似ているのかは存じ上げませんが……

「お許しください……とは言いませんが、断罪されるのであれば受け入れましょう」意味があるとは……思いません。

しかし、こうすることで少しでも気が楽になるのです。

……メイドである以前に私は……脆い人間だった。

今もそうです……快楽に逃避して自己を保っているだけなのですから。

断罪の言葉を述べられたら……きつと私は……

跪き……押し倒されるとしても向こうにとつて都合の良いように……

私はもう気持ち悪がるなどという反抗はいたしません……喜んで受け入れましょう。

肩に手が乗る……湿り気を帯びた物で蛭の集合体なのは間違いないでしょう。

次いで……顎を掴まれクイツと持ち上げられ……

片膝をついたマーカス様が私に視線を合わせているではないですか。

「マーカス様……マーカス様の御姿と同じく、慈悲深き御心も模倣されてるのでしょうか？」

規律を重んじるところはございましょう。

しかし……規律を守った配下には相応の慈悲を恵んでいただけますことでしょうか。

……もしかしたら、この蛭達も晩年のマークス様のペットだったのかもしれないね。

統率の取れた動き、一糸乱れぬその動きは……正しく……

「あ、ああ？……私をどちらへ!?!降ろして下さいませ、メイドめは歩け……ふ、ぐうっ……」

蛭の擬態は解かれなまま……私を抱きかかえ、何処かへと運ぼうとされました。ただでさえ重たい身体、自分で歩こうと言うのですが……腹部より走る快樂。

お腹の中で蠢き始める多数の胎動……間違いないです、破水……しましたね……産道を下り始めるいくつもの命を産み落とす、この快感……っ♥

ああ、ご子息の御尊顔を見られないのは……残念極まりますし、お乳をあげられないのも……残念です……

「ああああっ♥あっ♥あふああっ♥♥♥」

抱えられる中、揺られながら……一つ一つお腹の中から卵や孵化したばかりのお坊ちやまたちを……産み落としていく。

……擬似的なセックスみたく思えて、何度も何度も……絶頂に至りながら、もう、何処へ向かうか把握することがままならなく……

う、あ……何が身体に這って……♥

「ツ♥蛭のご主人様ですか……どう、ぞ♥♥」

お顔からこぼれ落ちた……蛭が一匹、二匹……私の乳房に張り付き溢れる母乳を啜ろうとされてました。

さらには乳房の先端にも食らいつくモノまで……何処へ運ばれるのかは存じませんが……これも、良いでしょう……♥

想像上でしかございませんが……同じ主に仕え、慕っていたでしょう存在……親近感
は湧きます。

身を委ねるのは、良いでしょう……

この女は何だ、Tや始祖に感染しても尚人の姿を保ち続けている。

精神的な所には綻びが見え隠れするが……思わぬ拾い物だ。

体液、血液からは変異してはおかしくない濃度のウイルスが検出されている。

……うわ言で私の名を叫んでいるが……ふむ。

この女の詳細は調べつつ愛しい我がヒル達でもっとかき乱してやろう……

全ては私を裏切り、葬り去ったスペンサー……アンブレラへの復讐のため……

——粘液に塗れた手記の切れ端より

……どれほど、イキ続けたのでしょうか？

出産で失神する程に快楽を感じ、果ててしまうのは……母胎としては落第点でしょうか？

「こちらは……何かの研究施設でしょうか？」

「ふむ、やはり襲わない……いや、別なエサを啜っているのか？
胸元に感じるのは複数の湿り気……ヒル、でしょうか？」

目を向けてみれば糸を引いて引き剥がされているヒルと……その先の青年。

正気を持っているご様子で……その姿は何処かで……

目鼻立ちがマーカス様にそっくり……ご息が居たとは聞き及びませんが……

「マー……カス、様？」

「……チツ、目覚めたか……研究に戻りたいがその前に……さあ我が子達、エサの時間だ」

……私は……ああ、囚えられてしまったのですね。

手術台のようなベッドに両手首を捕われ……何かの機材がいくつも並ぶこの部屋は

……？

臍氣に出してしまった言葉に忌々し気にコチラを向くと……手を鳴らして別な部屋へ。ともすれば、あのヒル達の主とみて間違いないでしょう。

であれば……私のご主人様と見て間違いございませんね。

願わくば、次にお話出来るタイミングがございましたら……マークス様との関係をお聞きしたく……

ああっ♥ヒルのご主人様達があっ……身体に、胸に……♥

「そ、そこまで空腹だったので……ああああああっっっ♥♥♥」

結束し、私を雌牛の様に……搾乳しようとされているのですね。

大きな掌となったかと思いましたが……乳房を包み込み、何度も揉みしだいて♥

乳房にも吸い付いて、何度も何度もものにゆ、ものにゆと♥♥

余程空腹だったのでしょうか……♥メイドめの母乳をご所望でしたら……いくらでも、捧げましょう♥

ご主人様もそれをお望みなのでしょうか……♥♥

「ふあああっ♥♥ど、う……ぞお♥♥メイドはっ♥♥孕む準備は……できておりますっ♥♥」

お腹を膨らませれば……次は、私を母とすべく産み付けようとされているご様子。

どうぞ、どうぞ♥メイドめを使い潰してくださいませ……
それが、罪滅ぼしになり得るのですから……

最初は大きな掌となつてベルファストを搾乳していたマーカスの手下たるヒル軍団。
しかし段々その空腹は満たされ……マーカスと同じ体を模せば今度はベルファスト
を強姦し始めた。

そのペニスは酷く歪で……いくつものヒルが卵を抱えて蠢くモノ。

性行為を深く認識はしていない、しかしベルファストという極上の苗床に自分たちの
卵を叩き込みみたい。

その欲望がこうして形をとつた……ベルファストの膣を押し分けながら深く深く入
り込み……

卵を抱えたヒルが一匹子宮の奥へ潜り、その卵を産み付けては別なヒルにバトンタッ
チしていく。

産み終えたヒル排出の為に腰が引き抜かれ……別なヒルがまた叩き込まれる。

「お”お……お、ほ……♥♥」

その本能的な快楽というものはベルを絶頂の彼方へと追いやる。

愛おしく思う主人に腰のストローク一発で何発もの精液を叩き込まれるも同然のこ

とをされている。

本来ならば悍ましいとすら感じることも……汚染されきつたベルの精神は、悦びに捉える。

マークスが戻ってくるまで……互いに満たし合うこの給餌は続く……

終幕・人鬼は生まれ変わる

Ｌウイルスに罹患した者のフェロモンはあらゆる雄を誘惑する。どんなに理的であれ増幅し続ける本能に抗うことは出来ない。

アンブレラ社の創立メンバーはオズウエル・Ｅ・スペンサー、エドワード・アシユフォード……そしてジェームズ・マーカス。

前者二人は富豪、貴族……いわば資金を出した者。

研究は主に生物学者であつたジェームズ・マーカスがしていた。

アフリカの奥地で発見された禁忌のウイルスを発見してから何年と……長い年月かけて研究していった。

アンブレラ社は表向きこそ製薬会社であつたが……その実、ウイルス研究をしていたのだ。

始祖花と呼ばれていた物から採取されたそのウイルスは始祖ウイルスと名付けられ研究されていた。

偏執なまでにマーカスは研究に没頭していった。

マーカスはその生涯において友人というものを作った試しは両手で数える程度に留まる。

極度の人間不信とも言える、当然ながら女性関係ももった試しはない。

信頼を置く人間も無く……愛された事も無い。

殻に閉じこもり研究に没頭する秀才であった。

研究の最中光明を見出したヒル達に偏愛を持ち出し子と言い出したのも何かの揺り戻りかもしれない。

……親に、隣人に愛されなかった故の孤独の揺り戻し。

他人に冷酷であるのは自分が愛されたことのないからか……

ベルファスト……私が殺された後に配属されたらしい私配下のメイド。

実に滑稽だ、死を秘匿して仕えさせていたという資料があつた館から見つかった。

厳密には裏切り者のスペンサーが雇い入れて私の配下としてねじ込んだらしい。

腹立たしい……勤務は……ふん、悪くないが所詮は女。

日常的に男に求められ拒むこともしなかった。

聴取した所拡大解釈をして自分に都合のいい様に解釈を捻じ曲げていたようだった。

肉欲を貪る為だけにな、卑しい淫売め。

まあ使い道はあるとみて引き取ったはいいが……どうにも私のかわいいヒル達の他、Tの実験生物達が盛る。

由々しき事だが脳が死滅しているはずのTの失敗作共を制御する糸口になるかもしれない。

それに手入れ不要で再利用も可能なエサだ……腹が膨れるまでその無駄に巨大で甘ったるい乳を使わせてもらおう。

生き餌は少なく随分と我が子達も飢えていたからな。

細胞サンプルの研究もそうだが……実験生物達の行動も観察し復讐を果たしたあとの研究に役立ててやろう。

私は、どれ程……快樂の彼方へと逝っていったのでしょうか？

特等……お慕いしているマークス様の幻影を見て……ヒルのご主人様達へご給餌させて頂いていたのは……覚えております。

今も乳房には粘液がこびりつき、テカテカと光沢を放っています。

相変わらず手足には手枷があり……私を囚えているご様子。

あの美青年は一体……マークス様はその生涯を研究に捧げたと言います。

文献で知ったマークス様は……かなり、人嫌いだったとも言います。

もしかしたら、等という過ちは犯しそうにありませんし……愛人の子という線も無いでしょう。

……御本人に直接問いかけてみれば解るかもしれませんが。

「今はそれよりも……このお腹に抱えた物を無事産むこと……ですね」

あのマーカス様に擬態されていたヒルは皆……姿を消していました。

私のお腹は随分と膨れ上がり……乳房の谷間を押し分けていました。

高鳴りは強く……いくつもの命が私の中に宿っているのが分かります……寵愛賜り

ましたこと恐悦至極……

卵は……ああ、一つ一つがそう大きいものではございませんね、産み落とす時が楽し

みな位です。

あのムカデのご主人さまの卵は……中々にヘビーでしたので。

「静か……ですね……」

少し身動きをしたら私を戒める鎖の金属音はしますが……それ以外は私の呼吸音程

度。

文字通りにシンと静まり返った……一人の時間ですね。

この、ゾンビ騒ぎが始まってからこんな時間は……あまり、ありませんでしたね。

茹だった頭がすーっと冷え込んでいくのを感じます。

「……あの、マーカス様に擬態されたヒルは一体」

疑念が一つ一つ胸に浮かんで消えていく。

以前はメイドとして、完璧なメイド長、ベルファストを演じることで自分を保っていた私が……今は完全に地でベルファストとなっている。

その事についても……自覚し改めて考えれば……これからどうして行けば良いか悩むものです。

真に仕えるべき主がもうどうの昔に死んでいて、お世継ぎも居ない。

もう日常に戻るのとは不可能と思われるこの身体に……少し雄を見てしまえばご主人様と見てしまう今の精神状況。

歪……という以外にありません。

足音……あの青年でしょうか？

「……フン、淫売らしい姿だな」

「ごきげんよう……あら、何を驚かれていますらっしゃるのでしょうか？」

「フン……私のかわいいヒル達がこんなにも盛って卵を産み付けたのは意外だったただだ」

ヒルにかなりの愛着をもっていらつしやるご様子。

一部の奇特な方がヒルに愛着を示す時はありますが……ええ私もその一人になって

しまったのですが。

……こちらを見下ろす青年は、異様に冷たい目をしていますね。

侮蔑というよりも……敵として見ていると言えますか。

そこも含めて脳裏をチラつくのが……マーカス様……

「一つ、質問してもよろしいでしょうか？」

「却下だ、生き餌に過ぎない貴様に質問権は存在しない」

「……承知致しました、マーカス様」

とても高圧的な態度、目鼻立ちの類似点……立ち振る舞いから……

私がこうも産み付けられる前、ヒルの皆様方に殺到される前にチラと聞こえた……研

究の単語。

カマをかけてみたのですが……

「フン……」

まさかとは、思いますが……驚いたようで平静を装い鼻を鳴らして……

私が正気でもってマーカス様と呼んだのが意外と言いたげな雰囲気……

「……お会いしたく、ございました」

ああ、私は……ようやくと、御主人様にお会いできたのですね。

この胸に沸き出る歓喜、ああ……ああつ……ようやくお会いできたというのに、もう

私は……！

貴方様に仕えるには、身体が汚れきっている……！

誠心誠意……償いを、ご奉仕で持つて挽回を図らねば……

マーカスは困惑していた、眼の前のメイドがマーカスの事をしつかりと認識した上で声を震わせ、歓喜の涙を流したのだ。

拘束されている最中で出来る限りに頭を垂れようとするその姿は頭頂部に残っているホワイトプリムに似合った行動。

マーカス自身は誰も信じれないが……その異質なまでの忠誠心にはドン引きしたのだ。

死んだ物とされた自分を、異常に若い姿の自分を見て、マーカスと直感したのもドン引き。

人の事など知ったことか、全部自分にとっては都合のいい道具としか見てないマークスでも……自分が慕われる人間ではないのは知っている。

教え子として手塩に掛け育てた科学者、ウィリアム・バーキンをして裏切ったのだから。

「メイド、なぜ私がマーカスだと？」

「そのお言葉が理由にはなりませんか？」

「……理解に苦しむな、淫売め」

「つ……申し訳ございません」

見た目上は忠誠を見せているが……この女とて裏切る。

マーカスの心中は非常に猛り狂っていく。

ただの実験用の生き餌であり……自分の子とまで言うヒルを増やすための苗床に過ぎない女に……なぜ揺さぶられなければならない。

怒りは憎悪を呼び起こし……さらなる力を求めるマーカスの本能を刺激した。

「グツ!?……ぐお……おお……」

「マーカス様?!?いい、いかがなされ……」

マーカスは始祖ウィルスにより変異し、統率を執っていたヒルがすべてをコピーし、蘇生したようなものだった。

ヒルがすなわちマーカスであり……いくら人格をコピーしたとして……

その小さなコアに宿る本能まではねじ伏せる事は出来ない。

ベルファストというウィルスに適合した苗床を前にして……数時間と理性を持ったのが奇跡と言える。

あつという間に人の身体を留めなくなり……結合しあつたヒルで形成された……巨人のようになつた。

「……マークス様、それが、貴方の御心なのでしたら、卑しい淫売のメイドは……喜んで受け入れます……♥」

いくつもの触手を携えた異形の巨人はベルファストという美女に覆い被さる。

股座には何も無い……だが、触手がペニスのようになり股座に迫る。

膨れ上がった乳房には花卉のような触手が……本能というものがベルファストを求めた。

ずちゅん♥ずちゅん♥ずぶ……ぬぶうっ♥
 「~~~~ツツ♥♥あかふ♥♥んむうっ……うっ♥♥——っっ♥♥」

妊婦のように膨れ上がった腹部に触手と化したヒルの集合体が潜り込む。

始祖ウイルスにより変異したヒル達の特性を活かした物だ。

そしてウイルスが活性化していく中……ベルファストの体内のウイルスも活性化させ、より良い子を産ませようとしていた。

その為には快樂でイキ狂わせていく必要がある。

快樂こそがベルファストの中で変異したウィルスのエサである。

活性化したあとはベルファストが抱えていた卵が一斉に……孵化していく。

ヒルとなつていくおびただしい数の卵達……迎え棒となつてる触手に吸い込まれていき、マーカスの肉体へと変わっていく。

だが、まだまだ足りない。よりもつと……もつと良い種を仕込まなければならない。

それが今のマーカスの……女王ヒルの本能だった。

急速にしぼんでいく腹、搾り出されていく母乳……愛おしい、最も慕う主人との性行為に狂喜乱舞するベルファストは心底……

理性的に見ることが出来る雄が居れば……魅了されること間違いない、幸せな笑みを浮かべて……ヒルの触手を啜えこんでいた。

上でも下でも……前後ともに……深々と。

辛うじて残るメイド服の布も汚しに汚しながら……捧げていく。

女王ヒルとなつたマーカスは……陽の光、乾燥に非常に脆い性質を持つ。

それを克服出来ないことにはアンブレラへの……スペンサー、ウエスカー、バーキン……それら憎悪を向ける相手にも手が届かない。

生物的な弱点をどう克服するか……その為にも自身とベルファスト……ヒトのDN Aを配合する必要があつた。

……そう、生まれ変わりを狙っていたのだ。

ヒルの触手がうねり、膨らみ……膣の中で一際大きくなる、そして……中央から拳大の膨らみが送られていく。

それはマークス自身のパーソナルを抱えた女王ヒルのコアであり……

ベルファストを確実に孕ませる……疑似精液の塊だった。

「——ツツツ♥♥……あ♥おまち……に……♥ふおつ♥ほおつ……♥♥」

崩れ落ちていくヒルの身体。

ベルファストの卵子を取り込み、融合してから着床すると……その感覚があるかのようにはベルファストは身体をくねらせ、絶頂に浸る。

薄暗い……研究室の中で……事は恙無く終わったのだ。

程なくし、真っ先に理性を取り戻したのは……ベルファストの子宮で受精卵同然となったマークスだった。

自分自身も盛った事が信じられないが……それ以上にベルファストと繋がったがゆえにその心理状況も伺い知った。

疑いようがない……形はどうであれ、その忠誠心が真であった事を知り。

向けられていた、姿形も見せない自分への愛情を。あり得ざる青年体となった自分へ

も……

化け物へと変貌したあとも……その偏愛とも言える物が変わりない事を……知った。

這い出る事も出来ないが……自身の弱点というものを変えられるかもしれない。

そして……自分をしっかりと愛し、裏切る事が大凡有り得なさそうな味方を……メイドを手にした。

これは、マーカスにとつてはかなりの転機となり得た。

バイオハザードは起きたあとだが、そこにマーカスの姿は……無かった。

程なくし、ラクーンシティから遠く離れた山中にそれはそれは美しいメイドが居ると噂される。

写真を撮った者も居たが……その乳房のデカさに皆揃って作り話と鼻で笑う。

「ご主人様、お体はいかがでしょう？」

『フン……お前のおかげで純然たる人間の身体を再び得られたのは感謝する』

「……まあ♥」

そこに居たのはマーカスを肚に宿し、妊婦となったベルファストだった。

ハンター用の小屋を乗っ取り……そこで静かに潜伏していた。

乳房の巨大さはより大きくなり乳房だけでも子を為せるのではないかと言われるほどに大きくなっていった。

それでも動ける、メイドとして職務を果たしていた……時間が経ち、マーカスとしっかり対話し……

そしてウィルスの制御に成功したからとされる。

人の外観を留めておきながら……ベルファストはタイラントに勝るとも劣らない力を得た、マーカスの尖兵であり母胎となっていた。

『あとどれ程でお前の使い込まれた膾から這い出れるものか……』

「あと8ヶ月は見たほうが良いかと」

『クソツ……早く這い出て……』

「今は隠れ、力を蓄えましょう……愛おしいマーカス様」

これが皮肉にも……スペンサーが求めた新人類、不老不死に……裏切られ一度落命したマーカスが近づいた。

そう遠くなく生まれ落ちるマーカスはウィルスに完全適合した新生児になり……

密かに、密かにベルファストと過ごし機を窺うことになるだろう。